確定版

平成23年度　第2回三重県教育改革推進会議第2分科会　議事録

Ⅰ　日　時　　平成23年8月31日（水）　15:00～18:00

Ⅱ　場　所　　ホテルグリーンパーク津「木犀の間」

Ⅲ　出席者　（委　員）太田　浩司、奥田　清子、末松　則子、杉浦　礼子、土肥　稔治、
松岡　美江子、向井　弘光
（ゲスト）須田　寛氏（東海旅客鉄道株式会社相談役）
（事務局）真伏教育長、山口副教育長、齋藤高校教育室長、飯田室長、
藤田教育改革室長、加藤、井坂、森井、原、河合、岡田、北村、
北原、辻、寺、山路　　以上24名

Ⅳ　内　容

（副教育長）

皆様おそろいですので、ただいまから平成２３年度三重県教育改革推進会議第２回第２分科会「キャリア教育の充実」を開催します。委員の皆様方には８月１１日に第１回を開催させていただきまして、同じ月に２回も開催させて頂くことになり、日程調整などで大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫びします。

さて、本日はゲストといたしまして、東海旅客鉄道株式会社相談役であられます須田　寛様をお迎えいたしまして、講演を頂き、その後質疑をしていただければと思っています。皆様ご承知のように須田相談役におかれましては、昭和２９年に日本国有鉄道に入社されまして、昭和６２年に東海旅客鉄道株式会社代表取締役社長、平成７年には同社代表取締役会長、さらには１６年６月に相談役に就任されております。また、社団法人日本観光協会、名古屋商工会議所などの公職を歴任されており、現在も活躍をされておられます。特に地域の産業文化財を観光に結びつける産業観光を提唱されており、全国の地域活性化に大きく貢献されております。本当に幅広く活躍をされております。また、加えまして、日本の将来を担うトップリーダーを養成するということで、平成１８年４月に中高一貫校海陽学園の創設にも大きく関わられており、教育に対する思いも並々ならぬものと感じております。本日はご自身の経験を基に三重の子どもたちが、あるいはその保護者、県民に対して、キャリア教育の充実をするために新鮮な、そして貴重な視点で議論できるヒントを頂けると期待しております。委員の皆様方、須田様本日はよろしくお願いします。なお、教育長は別の公務が終了次第参加いただきますので、よろしくお願いします。では、ここからの進行は杉浦座長にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いします。

（座　長）

では、委員の皆様方、大変お忙しい中、また短期間のスケジュール調整にもかかわらず

参加頂きまして、ありがとうございます。それでは、第２回第２分科会をはじめさせて頂きます。始めに、本日の予定ですが、お手元にあります事項書に沿って進めてまいりたいと思います。こちらには時間のスケジュールが書かれておりませんが、前回皆様にもご承認頂きましたが、ただいまから須田相談役様に講演を頂きます。講演は１時間程度をお願いしておりますが、講演終了後須田相談役にも入って頂き、この第２分科会のメンバーで協議を進めていきます。これら全てを含めて１時間５０分程度と考えておりますので、時間としましては４時５０分を目処に事項書の３を終了させて頂きます。その後ですが、須田相談役をお送りし、１０分程度の休憩を挟み、審議に入っていくという予定をしておりますので、よろしくお願いします。それでは、ただいまから、須田相談役からお話を頂くわけですが、ご紹介はさきほど副教育長からありましたので、省略させて頂き、貴重な時間ですので、早速須田相談役様のお話を頂きたいと思います。よろしくお願いします。

（須田講師）

ただいま紹介を頂きましたＪＲ東海の須田でございます。今日はお招きに預かり大変光栄に存じております。ただ今もご紹介頂きましたように、私は教育の専門家ではございませんし、教育に関しましては全くの素人で、ただ教育を受けた方々といろいろと仕事をする機会があることと、家族にも教育を受けた者がいるという程度のものです。その辺から見まして、私が教育についてどのように感じているか、また経済界全体でもいろいろと教育のことについて議論される場が多くあります。いろんな面で、経済界でも関心の高い事でもございますので、どんなところに我々が関心を持っているのか、どんなことを教育に対して期待をしているのかについて、何らかの参考にして頂ければと思い、出席した次第でございます。ちなみに、ＪＲ東海は、東海道新幹線を主に運営している会社ですが、在来線につきましては、関西線で名古屋から亀山まで、それから紀勢線は亀山起点で新宮まで、参宮線は多気から鳥羽まで、あとは名松線というのがございまして、松阪から伊勢奥津まで行くこととなっていますが、現在水害の関係で家城までで止まっておりまして、そこから先はバスで対応しています。必ずしも十分なサービスが行き届いているとは思いませんが、三重県の場合は非常に長い路線を待たせて頂いておりますので、極力私どもは皆様方の地元に参上いたしまして、会社としていろいろなご指導を頂いているところであります。

話を３つに分けてしたいと思います。第１のパートは教育全般について、私ども、産業界の立場にある者が、教育に対して、どのような気持ちを持ち、どのような期待をし、またお願いをしたいと思っているかということでございます。第２点は今日の主たる議題であります、キャリア教育についてですが、私どものような産業関係に携わっている者にとりましては、後継者の育成も絡んだ非常に重要な問題であり、関心の深い問題でありますので、キャリア教育についての私どもの考え方やお願いを申し上げたいと思います。第３点目は、非常にユニークな学校でございますけど、海陽学園というのがございます。これは財界で創設をさせていただきました中等教育機構でございまして、中学３年間から高校

３年間が連続しておりまして、６年間の一貫教育をするという事で設立をさせて頂きました。もちろん愛知県の御認可を頂いてですが。この点につきましては、ここでは若干意欲的な試みをしておりますし、キャリア教育なり教育全般についての私どもの理想といいますか、そういうものを体現すべく創った学校でございますので、どんな趣旨で創っているのかどんな状況なのかについて最後のパートで申し上げたいと思います。ちょうど１時間お時間を頂いておりますので、お話をしまして、後は御質疑を頂く中で、追加でお話を申し上げたり、ご意見を頂けたらと思っています。まず、教育一般でございます。これは申し上げにくい事でございますが、端的に申し上げまして、今私ども経済界は、今の教育に対して少々、焦りを持っています。同時に教育に対して非常に期待も持っています。そのことをまず最初に申し上げたいと思います。期待と焦りが混ぜ合っている状態であるというのが率直なところであります。どうしてそういう焦燥感が出てきているかという事について、問題意識を申し上げますと、最近非常に青少年犯罪というのが増えてきております。未成年の犯罪が非常に増えている訳で、場合によっては中学生高校生で犯罪を犯す者もいるという状況ですが、なぜ一体増えているのか、大変だな何とかならないものだろうかということで、少し焦りがあるということでございます。教育の責任だけでは無い訳でございますが、社会全体の責任ではございますが、焦りがあると。

２番目でございますけれども、ゆとり教育ということが言われてきました。土曜日も休みになりましたし、非常にいろいろな意味で、無理をしないで教育をしていくと。その中でよく聞かれることですが、なぜ円周率は３．１４ではなく、３．１なのかと、台形の面積を出す方程式をなぜ教えないのかというような苛立ちも若干私どもにはございます。非常に基礎的な知識でございますが、なぜ、そういったものまでゆとりだと端折られていくのかと。そして現にまた、教育レベルが中国より落ちてきたとか、世界最高レベルであったものが、必ずしもそうではないということであります。何とか元に戻せないものかということが焦りの２番目の点でございます。教育レベルの問題とゆとり教育も問題、これは若干偏差値教育の限界がきているのかもしれませんが、そんなことについての若干焦燥感があると。

３番目でございますが、産業界の人間が特に意識していることでございますけれど、最近理工離れというのがありまして、後継者の育成についていろいろ難しい点が出てきておりまして、はっきり申し上げますと、技術系のエンジニアを中心とした後継者が不足をしておりまして、このままでは事業を将来のばしていくことが出来ないのではないかと心配している企業も出ている次第で。そういった理工離れについて、どのようになっているのだろうかという焦燥感があるということでございます。以上の点について考えてみると、我々を含めた努力も当然のことながら、やはり教育に依存するところが非常に大きいと、こういうものについては。従って、こういう点の焦燥感を除去して頂けないものか、教育の方での改善をお願いできないものか、そういった気持ちが産業関係の者にはあることは否定できないところであります。しかし、なぜこうなったのかと良く考えてみますと、天

につばをする訳ではございませんが、結果的に自分たちにも降りかかってくる、みんなの責任なんだと思う訳であります。それはどういうことかと言いますと、教育が低迷しているという事は確かに事実かと思いますが、これは教育界の責任だけでは無しに、まず国家目標が無いからだと思います。日本の国をこういう方向に持って行くのだという明快な目標を持っておりませんから、教育の心棒になるような、教育のポリシーの基本が固まらないのではないかという気がする訳であります。従って、これは教育界の責任というよりも国全体、国民全体の責任として、国の目標というのはもっとはっきりと示して、それに向かって教育が結集されていかなければならないと思うのです。今後、こんな事はあってはならないことですが、私は戦争中に教育を受けて参りました。私が小学校に入りましたのは昭和１２年で、ちょうど日中事変が始まった年であります。中学校に入りました昭和１８年は、太平洋戦争がかなり深刻な状況になっている時期でありまして、ちょうど中学校から高校にかけての時期に敗戦を経験しました。その時覚えておりますのは、戦争中は戦争に勝つのだという、いい目標ではありませんが、そのために教育面に全てが結集されていたのであります。とにかく朝から晩まで教育では、戦争に勝つにはどうしたら良いのかということで一貫しておったと思います。それは、間違った方向であったのですが、一貫しておったのは事実です。その時には、従って教育の方針というのははっきりしていたと思います。そして、戦後は、戦後の復興を早くやらなくてはならないという目標がありました。（戦後の復興の後は）経済の高度成長というのがありまして、当時の池田内閣が所得倍増、もうけを倍にしますというわかりやすい目標を掲げたものですから、わーっと国民の間に広がって、国もそういう意味合いで、経済の成長ということが大きな国家目標になりました。教育にもその点が大きく反映していたと思います。だから、ゆとり教育の反対の事も行われて、偏差値教育もそうであったかもしれませんが、とにかく優秀な人間を創ろうと、一時教育が経済の成長の方向に向かって進んでいた時期がありました。これも行き過ぎがあったかと思いますが、目標が有ったのは事実なのです。経済の成長が終わったら、ダラッとなってしまったわけであります、バブルが崩壊して。今は低迷しておりまして、どっち向いているのかわからないと。（目標が）無いことに問題があると。何とか国家目標というのをはっきりさせるという事を私どもは要望したいし、教育に置かれましても、大きな目標というものをどっかに創っていく必要が有るのではないかという感じがするわけでございます。それが私どもが焦燥感を持つ理由ではないかと思う訳でありまして、我々にも責任が有るのではないかとも思います。

その次に、社会全体が教育について責任を持たなければならない。それが若干誤解をされておりまして、学校が教育に対する責任を全て負わなくてはならないと。何かあると、学校はけしからんと、どうしてこういう風になったのかと、もっとしっかり学校教育をしないかとなります。学校にも責任は有るわけでありますが、家庭と学校と職場即ち企業の３つは、それぞれ全部その組織にいる人を育成する義務があると私は思う訳であります。人生を３つに分けて、家庭と学校と企業が３分した責任を持たなくてはいけないと。どう

も、その点につきまして、家庭と産業界が教育に対する熱意と責任を充分果たしてないのではないかという反省を持ちながらも、教育に対する焦燥感というものが出てきていると思う訳であります。我々もこれではいけないなと自分にも言い聞かせている訳であります。教育は、社会の人間が全て家庭も学校も産業界も含めて役割分担をし、責任を持たなくてはいけないのだという事についての自覚が無いことが教育に対する焦燥感が出てきた大きな理由ではないかと思います。

3番目は、産業界の特殊事情でございますが、教育の役割というものについて産業界の自覚が、どちらかというと欠如している。従いまして、学校から出てきた卒業生の質が大分落ちてきたとか、そんな事ばかり言っていますが、自分たちもまた教育していかなければいけないという事を考えずに教育の事ばかり言っている事についても、私たちは焦燥感を持つわけであります。従って今申し上げましたように、はっきりした目標というものが作られなければならない。そして、社会のあらゆるものが、役割分担と責任を持たなければならない。そういうことが教育を改善するための大きな鍵ではないかと。その中で教育機関がまとめ役にとなる訳です。全体の教育のコーディネーター的な役割を果たしていただいて、あるいはコンサルタントの役割を果たしていただきたい。その3つをつなぎ合わせる役割を教育機関に果たしていただく必要があるのではないか。こんな感じがいたしております。

このように焦燥感の原因を解明いたして参りますと、これからどうしていったら良いかという方向がそこに出てくる訳であります。私どもは考えております、これからの教育の方向といたしましては、次の3点かと思います。

1つは、基礎教育の充実ということをもう一度考え直してみるべきではないかと。ゆとり教育も結構ではございますが、基礎教育が欠如しているのではないか。理科、数学、国語、英語のこの4つですね。昔で言うと、読み、書き、そろばんということでしょうか。これだけは、いくら教育してもしすぎることはない。この辺が、ゆとり教育で一律になおざりになっている。それから学校の教育を見ておりますと、高校や大学の試験に無い科目の勉強は軽んぜられる傾向にあります。従って、英語とか数学とか、国語とかは、上級学校の試験の際に必ず必要ですから、そのためには高校でも中学でもあるいは大学でも勉強いたしますけど、大学の入学試験に無い科目、高校の入学試験に無い科目については、なおざりになっている訳です。それも非常に残念な事だと思います。例えば、私立大学の中には、数学を試験の中に入れていない学校もたくさんありますよね。そこに行こうとしている人は、高校に入ると、数学の勉強はしなくなるのです。教育機関の方でも、国立大学に行く人には、目を掛けて教育するけれども、数学の無い所に行く人に対しては放任してしまうと。何かそういう基礎教育を充実するという事について、まだ不十分な点があるのではないかという気がする訳であります。基礎教育をやってからゆとり教育が叫ばれなければならないという感じがする訳であります。これは、若干雑談でありますが、私いつも経験するのですが、私はいろいろと本を書きます。私はワープロを打つ能力はありません。教育が

悪い訳でありますが。そうすると、原稿用紙に手で字を書く訳であります。それを出版社に渡します。彼らから校正が来る訳です。それを読みますと、私はこれは日本人が書いたものかと思います。私の字は読みにくいかもしれませんが、こんな文章はありえないと思うものが出てくる訳ですよね。当て字、今は変換と言うらしいですが、ひらがなの字を漢字に変換する時に、とんでもない字が付いています。あれは、完全に国語の教育が欠如していると。私の文章は、5回、6回校正しないと完成しません。私の字が下手だからかもしれませんが。私は、国語の教育が欠けているのではないかと思っています。それからよく笑われることでありますが、日本人は先進国の中で、英語会話能力が最も低い民族だそうです。特に経営者です、それは私どもの責任かもしれませんが。日本の経営者というのは、英語会話能力が比較的低いと、一方で中国人や台湾人や韓国人、特にその経営者はは語学能力が非常に高いそうです。それと、これもよく笑われるのですが、私ども会社はやりませんが、鉄道の駅の掲示に英語、ハングル、簡体字、繁体字が表記されています。４つ書いてあると、字が小さくて何が書いてあるか読めない。中国人や韓国人は、あれを見て笑っているそうです、あんなものは必要ないと。我々は、英語だけで十分だと。日本人と違って、小学生でも、駅に書いてある案内程度の英語は読めるのだと。また、漢字教育も受けていると。日本語にある漢字を見ただけでも、我々は何が書いてあるかわかると。あんな小さな字でぐちゃぐちゃ書かずに、漢字と英語だけで大きく書いてくれと言われます。それを見てもわかるように、いかに彼らの語学力は高いかと。海外競争で、企業の国際競争力で、語学力の不足というのは、大変深刻な状況になっていると思います。

その次に2番目の要望といいますか、今後の方向として考えられるのは、先端技術を受容して、発展させる能力、それの育成というものが、今ほど重要な時は無いと思います。どんどん技術が変わってまいります。それについての対応があります。もっとも新しい技術を全部先生方が勉強して教えるというのは大変でございましょうが、新しい技術の中には、一つの何か方向と言いますか、一つの技術についての全体を通じる何か、一つの理念が有るはずです。近代的な、先端的な技術が持っている理念を、これを先生方が頭に入れておけば、いろいろと応用が効く訳であります。だから、そういったものを先生方も身に付けて頂いてですね、それをやはり教育に生かしていく事が必要だと思います。まぁ、先般、放射能という問題が出てまいりまして、急遽理科の先生方が放射能の教え方を学んだという事がございますが、広島の問題があった時に、かなり放射能の問題は学んでいたはずなのですが、今ではやらなくなったのでしょうかね、先端教育、先端技術というものが、どんどん出てまいった場合には、教育機関の先生方は一歩先んじて、勉強しておいて頂く必要があるかと。我々にもあるかと思いますが、そんなような感じがする訳であります。

その次は、人間教育が大事であるという事です。学校のテストで良い点を取る教育だけでは無しに、心の教育、あるいは人間教育という事が重要であると思います。人間と社会のあり方というものについて、やはりこれは、先生方が体でしゃべって頂くしかない事だと思いますけど。教科書に書けないが生徒より長い人生経験というものを生かした教育と

いうものがあれば、子どもの伸びというものは随分変わってくるのではないかと思っております。

今、３つ申し上げましたが、基礎教育の充実、特に理科、国語、英語、数学ですね、それから先端技術の受容と発展させる能力をどうしたら伸ばせるかという教育、人間教育、心の教育の充実ということが必要ではないかと。産業界の者も、家庭の者もこういった事を念頭に置いて教育をやるべきであることは、さきほど申し上げた通りです。そのような事をやってまいります場合、いろいろと留意しておく事があるかと思います。それは教育というものは、連携と協働、協働というのは、協力の協と働くという字を書いて協働と言っております。そういった事が必要で、特に、産官学と言いますが、産業界と学会、そして民間がお互いに連携してやっていかなければならないという事が一つあると思います。同時にこれは産官民が連携して、教育のシステム、どこまでを家庭で分担するのか、どこまでが学校の分担の範囲か、どこまでを企業でやるべきなのかという事を、お互いに分担範囲がありますから、それらが連携をしながら、即ちコーディネートして、調整合わせて、そして教育のシステムというものを社会全体で作り上げる、そういうものを作り上げる主な調整役を教育界に果たして頂きたいという感じがいたしております。例えば人材の交流だとかインターンシップだとか、そういう風な問題だと思います。同時に地域との連携も非常に重要であります。三重県の県と各市町村と教育機関の連携とか、そういうものも必要ですけれども、産官学の連携と地域との連携、そういうものがやはり教育にとっては重要ではないかと。

もう一つは、教育の効率性の向上があります。教育というものはいくらやっても終わる事が無い、非常に大きな課題を抱えておりますが、これは能率的にやらなくてはいけない。従って、能率的に、効率を上げるためには、例えば教育にある縄張りの問題、学閥の問題、そういうようなものが除去されていかないと、せっかくの先生方をフルに生かしていけない。この先生は、りっぱな先生だと、しかしあそこに行くと学長さんとは学校が違うから、うまくいかないとか。国立大学は、自分たちの学校を出た人でなければ、教授になかなか登用しないとか、博士号を取らないと教授にしてやらないとか、まぁそういうような壁を教育の中で建てているのですよね。これを治さないと先生方は、人材に限りがある訳ですから、効率的に運用できないのですよね、狭い範囲でしか。これは、長い時間がかかると思いますが、何とかしないと教育の能率は極めて悪いと。従って、少数の先生が大きな効果を上げられるためには、教育界の縄張り、壁を除去しかないといけないと思います。それから、もう一つの面で今までと違った観点なりますが、教育機関の中にもう少し競争原理のようなものがあって、メリットシステムのようなものがあっていいんじゃないかという感じがいたします。例えば、研究費の配分なんかは、まさにそんな感じがする訳でありますが、それは、なかなか指標が難しい。どういったデータで分けたらよいかということはそう簡単ではございませんから、その辺を研究をしながら探っていく必要があるだろうと。そのような事が私の教育全般に関する事について感じている事でございます。教育に

対する焦燥感があります。青少年犯罪の問題だとか、教育の限界が来ているとか、理工離れで後継者がいないということについて、苛立ちがあると。それは、よく考えてみると、国家目標が無いからということが一つ、それから、社会全体が教育を分担するという事についての意識が薄い、役割分担と責任が持たされていない、産業界もそういう意味では、教育に対して必ずしも積極的に今まで取り組んでこなかったという反省がある。では、どうしたらよいかという事になったら、今言った、基礎教育の充実と、先端技術の受容能力を養うにはどうしたらよいかいう教育と、人間教育、心の教育が重要であると。それらの為には、連携と協働、産官学、地域との連携、いろいろな人々が連携することが大事であると。それをシステム化していかなければならないのだということです。それと、教える人には限りがある訳ですから、そういう人々の教育に関する能率を上げること、効率的な教育という事についても、やや技術的な事になるかもしれませんが、考えていく事が必要であると感じている訳であります。以上が一般論でございます。まぁ、素人が何を言うかとおっしゃるかもしれませんが、後ほど御指南を受けたいと思います。

次に、2 番目の話でございますが、キャリア教育論について、少し感想を申し上げたいと思います。キャリア教育とは何かと、これを何故英語で言わなければならないのかわかりませんが。私には英語能力が低いものですから、よくわかりませんが、どうも字引を引いたり、人に聞いてみると、社会人として求められる知識とか対応力を身に付けるにつきるのではないのかなと思います。そんなような意味合いで申し上げます。つまり、どういう事かと申し上げますと、勤労観とか職業に関する考え方とか、働くこととはいかに尊い事かとかいう事についての認識という事があると思います。それから、社会がどういう人間を望んでいるかということもそこにあるのではないかと、その社会の望む能力をどうしたら育成できるかというようなところが、キャリア教育の 1 つの目標ではないだろうかと私なりに解釈して、以下申し上げたいと思います。ここで大事な事がございまして、キャリア教育の中で、是非とも教育して頂きたいと大きく期待している点が 3 点あります。1 つは、まず、人と仕組み・組織のあり方、社会と人と言いますか、公と私、パブリックとプライベートと言いますか、そういった事についてのあり方というものが、子どもの頃から習い性となって、難しい理論とかではなくてわかっていかなくてはいけないのではないかという気がしております。社会に出て、キャリア教育の中で一番私どもが期待しておりますのは、社会人となった学生が会社に入ってきます。組織と自分というものの割り切りが出来ない人、組織の決定という事の意味合いがわからない人、要するに、はっきり言うと組織に順応性の無い人が非常にたくさんおります。そういう人が組織からスピンアウトして、外れていく訳ですね。まぁ、芸術家とか小説家になる方が良いのかもしれません。しかし、芸術家とか小説家になるにしても、世の中の組織、仕組みの中に組み込まれなければ、誰も評価できない訳ですから、要するに、そういう社会と自分との協調性といいますか、順応性というものは、これは習い性となって、自然と教育されなくてはいけない。例えば、子どもが、幼児が一番大事な事は、群れるといいますか、群れをなすという事ですね。人

間というものは大昔から群れをなして生活をしている訳ですね。それが人間社会の始まりですから。しかし、なかなか群れられない子どもがいます。それがどうしたらみんなの輪の中に入ってやっていけるのかという事を子どもの頃から何か教えるというか、習慣づけをするという事が一番大事だと思います。まぁ、大変お恥ずかしい話ですが、私の事を申し上げますが、私は子どもの頃は体が弱かった関係で、なかなか群れられませんでした。幼稚園に行きましても、私は独りぼっちです。小学校に入っても独りぼっち、除け者ですね。年に3分の1くらい病気で欠席していたので、そうなったのですが、小学校出るまで私には親しい友達は、ほとんどいませんでした。いつでも隅っこで小さくなって、蒼い顔していると、先生も相手にしなくなるのです。そうすると、こちらは、余計にふてくされてしまって、何もする気が無くなる訳です。それが、中学校、戦争が終わるまで続きました。戦争になると教練、体操、武道という最も得意としないものばかりが出てきまして、劣等生です。いくら他の科目の成績は良くても、絶えず赤点になる科目が5つ有る訳です。体操、教練、剣道、柔道、銃剣道が全て落第点でした。もしくは、それに近い点でした。そうすると、後の点がどんな点であってもクラスのビリの方になる訳です。そうすると、勉強をする気が無くなるので、群れから外れてしまい、じっとしている訳です。私の心のどこかにひがみ根性のようなものがあるのは、その時の影響なのです。それがどこで治されたかというと、就職してからなのです。当時の国鉄は、1年間合宿でみんなが同じ所に寝泊まりして教育を受けました。教育の中身はたいしたことはありません。同期生が50人くらいいたのですが、合宿して1年間生活する中で、最初、私はカルチャーショックでした。正直生きていけるかと思いました。軍隊に入った新兵が思うのと同じですね。しかし、段々同じ釜の飯を食っていると、順応していくのですね。1年経ったら、大体人と対等に物が言える、他の人とも同じようにおつきあいが出来る、群れられるようになったのです。1年間寝食を共にしたから、出来るようになったのです。しかし、遅すぎたのです、残念ながら。あれを小学校、子どもの頃からやっておけば、随分と人生が違っただろうなと思います。今は給食を一緒に食べるそうですね。私たちの時は給食なんてありませんでしたが。給食という制度があっても食べさせる物なんて無いので、無かったのでしょうけれども。給食だけでも、子どもたちの様子を見ておりますと、随分と違うものですね。同じ物をみんなと食べるというだけで、同質性というか社会に入ったような気がする。まぁ、寝食を共にすればもっといいのでしょうね。海陽学園を全寮制にしているのは、それなんですね。だから教育においてですね、一日の生活を共にするということを、どこかで少しでも出来ないか、1年中は出来ないでしょうが、どこかで出来ないか、これは得難いことになりますから。そういった人と社会との関係というものを、何らかの形で体得する、これは頭の中に入れるのではなく、体得する、体質化するということを、どこかでやる事が非常に大事であると思います。小学校の段階でも、中学校の段階でも全部有ると思います。それでないと、私が就職してから1年間苦労したように、しかし、1年間のそういった事が無ければ、実務に就いてもどこかではじき出されていたでしょうね。まぁ、そんな事になると人材が

死んでしまうので、これは非常に大事だと思います。しかもこれが無いことによって何が起こるかというと、公私混同が起こる訳です。よくございますよね、公私混同というのは。まぁ、偉い人の公私混同は新聞に出ますから、すぐにわかりますが、偉くない人の公私混同は沢山あるとお考えになってよいと思います。それかいかに組織をスポイルしているか、社会をスポイルしているかということですが、それは組織と個人、公と私、つまり人間と組織というものがよくわからないから、起こる訳ですね。それがわかっていたら、起こりっこないのです。自分がこういう事をすれば、みんなが迷惑するから止めておこうという事になるが、そういう事が十分頭に入っていないとやってしまうのです。これは非常に大事な事で、第１点として申し上げます。

その次にキャリア教育において重要な事は情報教育です。私は、恐ろしいような状態で情報化時代が進んでいると感じています。子どもが携帯電話を持っていますね。子どもが携帯電話で見てはいけないものは、携帯電話に出さないようにすると言っているそうですが、たぶんまだ実現してないのでしょうね。ませた子どもは、何でも見る訳です、怖いですね。情報教育は、携帯電話を持つ年齢である小学生からやらなくてはいけないと思います。情報教育は重要な事だと思います。何故かと言いますと、情報を判別する能力、良い情報か悪い情報か、これは見て良いのかどうなのかをということを本能的に使い分けられる事を養うには、相当小さい時からやっていかなくてはいけない。情報の受容能力、つまり情報を受け入れる能力、情報を発信する能力、そのためには自分の考え方をまとめて発表するという事、発表につながっていく訳でありますけど。発表の能力とは、相当小さい頃から徹底的にやっていかなければならないし、それも教えるというよりは、子どもが自然に自覚できるような何か１つ理念のようなものを、どこかで体で覚えられるよう、吹き込んでいく必要があるのです。もちろん家庭でもやらなければいけませんが、学校での情報教育というのは、キャリア教育では非常に重要です。企業というのは情報で生きているのですから、はっきり言って情報によって、浮沈をする訳ですよ。今、国際競争が非常に厳しい時ですから、良い情報を先に持った方が勝ちなのです。そうなりますと、この能力が養成された人がいるかどうかで大違いです。子どもの頃から、大事な情報がどこにあるかという事を考える。小学校６年生の子で、携帯電話で毎日ニュースを見ている子がいるそうです。これを万遍なくいろいろな人が持たないとお互いにぶつかり合いますから、それで私は情報教育は重要だと思う訳です。従って、そういうＩＴ技術、情報技術まで含めた教育というものを、相当小さい頃から徹底的に、家庭と学校と企業が連携してやっていかないと、社会で役立つ人間が出来ないという感じがします。それが２点目です。

３番目についてですが、複線教育と私は呼んでいるのですが、中学校までは複線では無く、みんな一緒でいいと思うのです。高校あたりになってきたら、そろそろその人々の前途、何になりたいかどういうことがやりたいかという事をそれぞれ把握した上で、子どもにそういう気持ちを持たせて、自分は将来こういう事をやりたいという事があったら、もちろんそれは途中で変わってもいいのですが、そういうものを発表させて、それにふさわしい

教育をしていくと。エンジニアとそうでない者との教育は、相当早くから分けていかないと、途中から急にエンジニアにはなれません。私の子どもの頃は、工業学校、商業学校、中学校と３つ並んでいました。工業学校の上には高等工業学校があって、そこからさらに工学部系の大学に進学できた。商業の方は、比較的就職する人が多かったけれど、商業学校の上に高等商業学校というのがありまして、名古屋高商という名門があった訳ですが、その上に商科大学、例えば一橋大学とか神戸大学とかがあって、中学から大学まで一貫して３本の線が立っていました。そのそれぞれに優秀な人間がいた訳ですね。例えば東京大学の「茅　誠司さん」という方が東京大学総長をされていましたが、あの方は東京の蔵前工業専門学校の出身です。あの方は東京大学の出身ではありません、東大は工業専門学校の生徒を取らなかった時期があるからです。東北大学の出身です。中学の頃から工業学校の教育を受けて、ずーと上がってきた人なんですね。商業学校、高等商業学校、神戸大学商学部を出て総理大臣をやった「宇野宗佑氏」がいます。あの方は八幡商業学校、彦根高等商業学校、そして神戸大学、昔の神戸商科大学ですね、商業教育であそこまで上がっていった人ですね。とにかく、商業教育で総理大臣になった例、片や工業教育で東大総長になった例ですが、今はそういうことにはならないと思います。何故ならないかというと、今は一貫教育、全部一般教育ですね、特別教育は、もちろん、あるのですが、今の工業学校というのは、数も少なく、昔のように、そちらの得意な人は、中学に入る段階で、そちら（工業学校）へ行くというものが無い。縦教育というものが、高校段階より上には必要なのです。複線教育ですね。そういった教育システムといったものを考え直さないと、キャリア教育、特にエンジニアの教育は、大学に入ってからでは遅いのです。一流大学の工学部が、今、何をしているかというと、聞いたところによると、1年生の間は嬉しくてにこにこして遊んでいると、2年生になったら勉強すると、3年生になったらもう就職活動し、4年生になるともう就職が決まって、後は消化試合みたいなものになっていると。1年間しか勉強をしていないで、優秀なエンジニアが育つ訳がない。要領のいい人は育つかもしれませんが。今、東京大学、京都大学ではどういっているかというと、工学部の人は大学院を出る人が多いと言われています。だから、今のエンジニアの経営者の方々は、この頃の大学出は技術的な基礎教育ができていないと。それは、今の教育システムが極端な悪平等主義に陥っていると、それが大きな一つのポイントですから、キャリア教育という事を考える以上は、教育の課程の在り方についても、そこまで考えて頂かなくてはいけないのだと思います。大事な事は特色を引き出して、その人が将来の進路を決められる材料を提供してあげるところまでが教育の使命だと思います。その特色を誰かが引っ張り出してやらなければならない。私の経験で恐縮ですが、自分ではなかなかわからないものなのです。自分でそれをわかる人はいいですが、自分の進路・特色は何だという事は、中学生くらいではなかなかわからないと思いますね。早く、それを引っ張り出して見つけ出してそれを磨いてあげれば、その人は相当な所までいけるはずです。そういうようなところが、教育では重要だと思いますね。引き出されたら、それを伸ばすためのシステムができていない

といけませんね。また、一律教育の中では駄目なのです。そのような事がキャリア教育には要るのです。例えばおまえはエンジニアに向いているぞと言うだけでも違うのですね。エンジニアでもおまえは化学系のエンジニアに向いているとか、機械工学に向いているとか、やっぱりあるはずです。そういうのを、どこかの段階で、先生方の方で引っ張り出して頂ければ、後は本人次第です。そのようなきっかけ作りというような事は、もちろん家庭でやってもいいでしょうが、企業に入ってからでは遅いのです、企業に入ってからでは形が決まって入ってきていますから。これは、自分でやるか、家庭と学校でやってもらうしかないのです。そのようなことが期待されると思います。

３つ申し上げましたが、人と仕組みの在り方、つまり社会（組織）と人間の在り方、社会観ですね、社会の中の人間というものを徹底的に教えていただくと。それに次に情報教育、情報の判別力、良い情報と悪い情報の判別力、それと使い方、それから発表の方法、まとめ方、報告の能力を養っていくと。また、ＩＴ技術を上手く使いこなす能力、機械に使われてはならない、今は機械に振り回されていますから、それから今の様に、本人の特色を引き出して、それを伸ばしてやるのが教育の使命なのだと。それには複線型のシステムも用意しておかないと、引き出したけれど、また、それが埋もれてしまうということが今はあるのだろうと思っています。この３つがキャリア教育で一番期待したいところです。

それから、次にその進め方でございますが、キャリア教育の話でありますから、教育と企業の連携が非常に大事だと思われます。私らはシームレスという言葉を使います。継ぎ目無しという事でございます。家庭の教育と学校の教育と企業での従業員への教育はつなぎ目が無く、一貫してずーっとつながっていく必要があると感じています。家庭と学校との間の連携というのは、ＰＴＡとか先生と父母との話し合いとかが有る訳です。先生方とじっくりと話し合って、三者面談でも何でもいいのですが、子どもの将来について、先生に学校での子どもの様子を聞いて、家庭でもそれをフィードバックしていく、また、家庭での子ども在り方について、どうしたらよいかと先生に教えを仰いでいくと。こういった家庭と学校の連携というのは、これはある程度やっていると。一方で、企業と学校の連携でそれに近いことというのは、なかなかこれが行われない。極端に言えば、大学でも高校でもそうですが、高校で就職した人が沢山いるとするとします。大学出た人も就職します。そこで、送り出し側の学校と、それを受け入れた企業ですね、企業の経営者、新入社員を受け入れた責任者が連携して、「お宅から来た子はこういう状態です。この人はよく企業に馴染んでいます。この人は企業に馴染まない、どういった教育になっていたのですか。」と。学校の方も、「この子の学校時代はこうだったと。こういう所に能力があるのです。」と。「そうですか、それではそういう所を伸ばしましょうか」という感じになって、企業と学校とがフィードバックし合うと。会社の方は生徒を取ってしまえば、学校の事なんてどうでもいいということですね。但し、学校の名前にはこだわりますが。学校でどういう事をしていたかという事は聞かない。東大に行って、あの生徒はどんな教育をしてきたのですかなんて聞きに行く人は誰もいませんよ。そういう事を本当は聞かなくてはいけないのですね。

学校の方も送り出してしまうと、それで終わりと。そして就職する時だけ、学校の生徒を沢山取ってくれと就職担当の先生が企業に来て陳情をする。それで取ってしまえば、それで終わりと。取った人がどうなっているのかという事はフィードバックしませんから。どういう人を育成すれば、あの企業に取ってもらえるのかという事について、何もデータが無いですから、今まで通りやみくもに教育しているだけと。何か、ＰＴＡと学校の連携にあるようなものが、学校と卒業生の就職先である企業との間に、企業の側からすれば難しいというかもしれませんが、大勢の卒業生のいるような企業との間にコミュニケーションがあって連携していく事が必要です。それをつなぐ１つの方法として、インターンシップというのがありますね。高校の上級生、あるいは大学生が企業に短い期間だけでも企業の中に入って、企業の従業員と一緒に仕事をすると。そして、その企業の仕事というものを自分で体得して自分の将来の進路を確認するとか。あるいは、そこで社会的な勉強をしてくるとか。インターンシップと言いますか。こういう事も非常に大事なのですが、こういうシームレスで家庭・学校・企業の３つの教育の流れを作っていくと、ずっと一つの流れのようにせき止めずに流していくことが、特に企業と学校との間に欠けていると思います。次に、教育機関同士の連携ですね。小学校、中学校、高校、大学という縦割りの連携の問題であります。一例を申し上げますと、小学生のキャリア教育から見れば、主に職場見学といいますか、例えば工場見学などが中心となると思います。軽い見学ですね。どんなものかというのを見ると。中学生になると、それに体験が入ってくると思います。ある程度の事について体験をする。例えば、焼き物を自分で焼いてみるとか、駅に来たら、駅の仕事を一部体験してみるとかというような事は、中学生になれば、既にあると思います。高校になると、就職を控えている人は、そこでインターンシップという問題が出てきますから、企業の中に入り込んで連携していく必要があると。小学校、中学校、高校で、そんなふうに、発達段階、成長段階の違いは当然ありますが、とにかくそういう初級中級上級教育の間の縦の連携、さっきは横の連携ですけど、今度は縦の連携が必要であると。さっきも触れましたが、教育と地域の連携もあるということです。そのような縦と横の連携、シームレス､つなぎ目無く円滑につながなくてはいけない、これがあって初めて教育というものは､一貫して大きな効果を上げるものであろうと思います｡そんなようなことをやって、お互いに確認し合う事が必要であるだろうと。そういう風な人間の育成、教育に関わる関係者全ての連携というものが大事でありますし､そういったもので､社会の教育システム、いわばネットワークというものを家庭と学校と企業と地域とで、作りあげていくという事が大事であると。そして同じような考え方の中に、さっきのように教育目標をはっきりさせながら進めていくという事が大事であると。キャリア教育というのは、徐々に企業人になるための移行の過程にある教育ですから、そんな様に少しずつやって、小学校から中学校、高校、大学と段々と企業の方に入り込んでいくような教育をしていかなければならないし、また企業の方でも、受け入れた人のフォロー、そして大学や高校の方での卒業生のフォローということを、企業の方と頻繁にお会いしながらやっていくと。そしたら、そこ

に就職をあっせんする場合も、企業の方もあそこの学校の卒業生なら受入れましょうという事になって円滑に行くはずでございます。やっておられる所もあるようでございますが、そういうものをシステムとしてどこでも当然の事としてやっていただく必要があるんじゃないかと考えております。キャリア教育につきましては、どこでもそんな事で縦と横の連携を大事にしながら、人と社会のあり方、情報教育、複線化の特色を引き出した教育をやっていただきたい。それが企業に生きていく道ではないかと思います。

３番目の段落の話になりますが、私どものやっている海陽学園について申し上げたいと思います。ここにパンフレットがございます。余分を持っていないのですが、これを一部置いておきますから、ご参考にしていただければと思います。

これは創立をいたしましてから約５年経っておりまして、今、高校２年生まで入っておりますが、中高一貫の教育でございまして、海陽中等教育学校という名前がついております。ただ、大学はございません。

なぜ、これを創ったか申し上げますが、財界人の豊田章一郎氏が教育に対して、非常に問題意識を強く持ちまして、何か財界でも教育を真剣に考えるべきではないかと言って、豊田さんが指導してやりました。豊田さんもこれに出資をしてくれ、それに中部電力と私どもの会社も入ったのです。私どもの会社で今、会長をやっています葛西が、豊田さんにいろいろご指導をいただいて相談をしながら、それから中部電力の社長にも入ってもらって実現したというのが経緯でございますから、トヨタ自動車とＪＲ東海と中部電力中心に財界でできた数少ない一貫教育の、中学校、高校だとお考えいただければと思います。
なぜ、創ったかということですが、実はこういう反省が私どもにもありました。名古屋には、企業の支店長さんがたくさんいます。いろんな企業の出先が名古屋にあります。東京や大阪に本社がある、そこの支店のトップの人々、ないしはそこに転勤して来ている人のほとんど全てが単身だという事が分かったわけです。

ある時、名古屋で災害がありました。水害の時で、確か土日にあった事だったのですが、その時にいろんな対策会議をやってみても、みんないないのですね、誰もいない。土日は全部東京、大阪に帰ってしまっています。名古屋には空いた家が残っているだけの全部単身赴任です。おびただしい数の単身赴任が名古屋にいるという事が改めて分かってきた訳であります。あれでは地元の財界人として、そういう人々は事実上、あそこに住んでないんですから、月曜から金曜までいるだけですから、地元の経済を担っている企業の代表が日曜日にはいないと。そんな事でいいのだろうかと。つまり地域に密着した仕事ができないという事なのですね。何故だろうと考えたところ、それは「教育」であった訳であります。何故、単身赴任しかしないのかと聞いてみたら、すぐ分かります。子どもの教育がありますから東京を離れられませんと。大阪、京都を離れられませんと言うのですね。それはつまり、子どもを東京や大阪の大学に入れるためには、そこの高校に入れなきゃいけないですね。そうすると、子どもがいる以上は、そこに奥さんを置いておかなければなりませんから、旦那だけこちらへ来て金曜日に家へ帰る訳ですね。それだったのですね、教育

問題だという訳です。どうしたらいいだろうか。名古屋で単身赴任をしないでいいような教育が創れるでしょうか。名古屋に良い学校がありますと。そしたら、みんなそこへ行って単身赴任しないで来るかもしれません。

仮に、良い高校が名古屋に２つか３つあったら、そこへ入りたいから単身赴任で来ない人が増えるかもしれない。そういう風な問題意識が１つあった訳ですね。地域に密着して仕事をしてもらうためには、そこに教育機関がなきゃいけない。そういう極めて単純な事に気がついた訳です。

それでは、何か１つやりましょうというので、創ったのがこれなのです。これもいろいろと、実は理念がございますが、この理念は２つございます。これは社会人を育成するためのもの、キャリア教育をやるための学校だと考えればいい訳です、中学からですから。基礎学力をまず養成すると。英語、数学、国語、理科の４科目を特に中心に、もちろん他もやりますが、そういうのが１つ。

その次に、社会性を維持するというのが２番目、社会性を養う。基礎学力を養うと同時に社会性を養う。そのための方策として全寮制を採るという事。つまり社会生活を子どもにさせる訳ですね。もちろん休日は家に帰らせるのですが。そうすると、否が応でも何十人かのクラスの人間は一緒の飯を食って一緒に生活いたしますから、社会性が養われます。チームワークが養われますね。従って、社会性を養う事と、共通学力、基礎学力を付ける事をやると。

そして、ここでは、大学受験教育は原則としてやらないと。つまり、大学受験教育をするという事になると、大学受験のための教育になる訳です。数学の試験のある学校に行く人間と、そうじゃない人間とで分けてやるとか、そのような受験の予備校的な事は一切やらないと。とにかく受験を念頭に置かずに基礎学力をつけて社会性を養って、将来、社会人になった時のキャリア教育の基本だけをやるにはどうしたらいいかという事を徹底的に追及しようというのが、実はこの学校なんです。一貫ですから、中学校から高校の間には試験がありません。中学の間で基礎学力をやると。ここではキャリア教育でも専門的な事は一切やらない。今の社会性と基礎学力に徹すると。

高校に入ったら、そこで先生が個別指導をして、その人間の能力も引き出しながら、子どもの話も聞きながら、おまえは一体どういう方向へ進みたいのだという事についての、おおよその方向付けをそこですると。そして、それに応じた教育を逐次、高校の段階、３年の間にやっていって、最後はインターンシップまで含めた事まで進めていくと。
そんなような事で中学の段階は基礎に徹する。高校の段階は、その人間の個性を引っ張り出して、その人間の特性に合った教育をかなり個別的な指導を含めてやっていくやり方がここの特色ございます。

今、３年生までございまして、来年は卒業いたします。その段階でここの人間が、まだ、その時は大学ができておりませんから、どういう大学進学率を持つかという事ですね。例えば有名大学に大量に入るという事になったら、ここの学校のレベルがさらに上がりま

す。そしたら、ここに大学をつくればいいかと。そこで、本当に地元のキャリア教育と学校とが一貫になる。最後はそうなるのです。

ただ、財界が創った学校ですから、先生には相当留意してあります。だから、立派な先生を集めてあって、学長は東京大学の工学部長をやっていた大先生ですが、そういう人に来て頂いて、先生はそれぞれ各科とも一流の先生を集めてあって、そういう面では何の問題もありません。したがって、今のようにそういう優秀な先生を集めて、こういういい設備のとこで全寮制教育をして、基礎学力と社会性を徹底的に養ったらどこまでやれるのかという、一つの課題を追及するための大きな新しい試みという事でやった訳でございます。ただ、その成果は、大学進学状況が出てこなければ分からない。

問題は人間の力と基礎学力のバランスがなければいけないですね。人間それぞれ自分の力を持っていますから、それに基礎学力を付ける事によって、自分の能力をバランスの能力にしなくてはいけない。バランスの取れた能力をまず作っておいて、そこからどんな人でも特性がありますから、みんな同じじゃありませんから、いろいろな分野に役立つ優秀な人を出せれば非常にいいのではないかと、そんなような感じがいたします。

そのような事でございますが、私どもが反省しておりますのは、今のような単身赴任が無いように、地元でも立派な教育が受けられますよ、という一つの地元振興策でもある訳です。

もう１つ、優秀な大学を出た人が多いのですが、ここ 10 数年来、私も痛感をしておりますが、そういう学校を出た人の中には、中ではテストテストに明け暮れて受験技術者になっている子が相当おりますね。テストは超一流の成績です。就職試験も一流なのです。就職します。そしたら、精も根も尽き果てて、産卵した後の鮭みたいになっているんですね。気力も無く、くたびれている訳です。就職した時にくたびれている訳です。学校の競争でそこまでやってきた、だから、自分の能力がいっぱいあって、それ以上に受験勉強ばかりやってテストに明け暮れてやってきたから、成績は良いのです。それだけでは、上手くいかないというのが一つの反省としてございます。（海陽学園では）そんな人間は絶対に創りたくないという事でございますので、伸び伸びした基礎教育をしています。

今言ったような事で、一流大学の卒業生に往々にしてあるような欠陥を除去するにはどうしたらいいか。それが、社会性と基礎学力を養うことなのですね。そんなような事が私どもの一つのこれまでの結論でございます。

取り留めのない話を申し上げましたが、ちょうど今、１時間ですので、このあたりで私の話を終わりまして、また、いろいろ私が申し上げた事について、お叱りをいただく点があったら、お叱りをいただく事にしたいと思っておりますが。やはりそういったような意味合いで、今、非常に重要な時期でございますので、私どもは社会的な責任を企業として果たすための全力の努力をいたしますが、教育機関におかれましては、ぜひそういった家庭と学校と企業の教育に携わる３つのものについてのコーディネート、連携の橋渡し役、コーディネート、あるいはコンサルタント、主導役をかっていただいて、全体として最適

の教育システムを今の日本に作りあげていく必要がある。同時に、その前提として当然、国家目標を早く作ってもらうように私どもも努力したいと思います。
ご清聴ありがとうございました。
（座　長）
　須田相談役ありがとうございました。
　それでは、引き続き、質疑応答に入りたいと思います。時間ですが、今から４時 50 分ぐらいまで時間を取っておりますので、今、相談役からお話いただきました内容について質問したいこと､あるいは第１回目の分科会のときにいろいろ審議をしていただきましたが、その件につきまして、発展的に考えるにあたって、何かご意見を聞きたいという切り口、なんでも結構でございますので、忌憚なくディスカッションをいただければと思います。いかかでしょうか。質問でも結構かと思いますが。
（須田講師）
　素人が何を言うかとお叱りをでも結構でございますから。
（座　長）
　委員の方に限らず、せっかくの機会ですので、教育委員会の方々も積極的にご発言いただければと思います。
（太田委員）
　先生、どうもありがとうございました。具体的なところで先ず、質問をしたいのですが。三重県ＰＴＡ連合会の前会長でございます。ただ、今は顧問をしております太田でございます。よろしくお願いいたします。
　一番最後に、海陽学園のお話をいただきました。私もこれが設立された当初から私の子どもたちを行かせたいと憧れだけを持って、結局は全員が、一番下の子どもも高校に入学したので、もう入ることはないのですが、この中で国家目標の欠如が、この国の一番大きな教育のポイントだと。この国の一つの大きな欠けているものではないだろうかというお話をされましたが、この海陽学園の中でも、やはり基礎学力であるとか、社会性を身につけていくともに、国家のあり方であるとか、世界のあり方であるとか、その中において、国家の目標、世界の目標、そういった理念は教育をされているのか、その辺をお伺いしたいと思います。
（須田講師）
　国家目標というのは、もちろんこの学校が創る訳にはいきません。ここでやっている事は、国家目標をつくるような前提として必要な事を教える事になります。
日本の伝統文化に立脚して国際社会で活躍できるような人間を養成するのですから、日本の伝統や日本の文化について、ここでは今の普通の中学、高校以上の時間を割いて、日本の国はこういう国なんだよということですね、国際社会の中で日本はこういう立場なんだよと、国際社会とはこういうもので、日本はこういう立場ですよと。そういう授業をやります。世界の中の日本というのが出てくる訳です。歴史の中から現代が出てくれば、その

先に将来がある訳です。国際的な社会の中での日本というのが出てくれば、今後、その中でどういう立場を日本が占めればいいかという事になりますと、そこで日本の方向が必然的に両方の接点から出てくるだろうと。それをみんなで考えようということにしたいのです。

それから、どういうようなことが出てくるか期待されるか。例えば国際交流国家といいますか、世界の人々が日本に集い合うと。日本で交流をして、世界の文化を日本で凝縮して、世界の文化の影響を受けつつ、独自の日本文化をそこにつくりあげていく、世界の文化国家に、交流文化国家でもいい。そんなことが答えとして出てくればいいと私は思っています。

日本の伝統文化というものを徹底的に教えるという、その中で日本の将来の方向を明らかにするのです。それから、国際社会で日本がどういう地位にあるか明らかにしていく。その点の掘り下げをやれば、みんながそれを考えるだろう。みんなで国家目標がどうあったらいいか、みんなで考えてもらおうというようなやり方でこれを取り上げていく。

それから、ここはリーダーの養成を念頭に置いておりますが、リーダーは何をしたらいいかということでございますので、さっき申し上げたように、人格の陶冶とか、今の基礎学力だとかを言っていると。そのためには全寮制度というのは前提になる。そういうようなことでみんなで国家目標を考え出していこうじゃないか、提案していこうじゃないか、そんな人が育成できるようにしたらどうかという感じに、この学校は今の段階ではなっています。

国家目標はみんなで創り上げていくしかないのです。どこかにはコンセンサスはあると思いますから、そういうようなことを考えるべき時期じゃないかと。そのための材料、そのための考える一つのきっかけを作ろうじゃないかと、今そんなところに徹しているはずでございます。

（太田委員）

ありがとうございました。先般、夕食をなかなか一緒に食べられずに、子どもたちと朝食は必ず食べるようにしているんですが、その中でお父さんのときの美術の教科書であるとか、音楽の教科書というのは、ほとんど西洋のものがまず先に来ているんですね。ほとんど最近、美術で。日本の様々な美術関係のことは後のほうに回されていたというのが当時の教科書に対して記憶なのです。

音楽の教科書でもそうです。ですから、西洋のものが優れていて、私たちの日本のものというのはちょっと劣っているというふうな感じで私たちは無意識のうちに幼いときに、受けていたという記憶があります。

ただ、成人をして外国にも目を向け、外国にも行って、自分の国の文化といったものをもう一度見直したとき、いやいや、これだけすばらしいものがあって、例えば印象派の画家の人たちは、日本のすべて当時の江戸期の日本の浮世絵等を学んでというか、そういうようなものもモチーフにしてというふうなことが後から分かってくると、大変誇りとして

持ってくるんですね。

ですので、先生が言われた、はじめにまず、日本の伝統であるとか文化であるということがされていることが大変うらやましいなと感じました。ありがとうございました。

（須田講師）

今、おっしゃられたように、日本の文化の形成された一番大事な時期は奈良時代なんですね。あの奈良時代の文化は、あの当時の西洋の文化に比べてもほとんど劣らないすばらしい日本文化があったそうです。

それはなぜかというと、あの頃既に国際交流があったのですね。遣隋使だとか遣唐使だとか中国との交流がございます。中国から有名な鑑真和尚とか高僧がたくさん来て、日本にいろんな向こうの仏教文化を伝えた。それが日本で受け入れられて、日本の伝統と合わせて独自の日本文化があのときに形成されたと。その奈良時代の文化というのは、その後、平安時代以降ずっと日本の文化の基礎になっている訳ですね。それはなぜか、交流で創られた訳です。しかも、交流の中で日本がその文化を受け入れて、独自性を失わずに同化できたということですね。それが成功につながった。

その後、日本がなかなか外国との交流が進まないようになる。例の江戸時代の鎖国になる訳ですね。外国との断絶があって開国をすると。その段階で、今度は日本と西洋の文化力が大きく開いていた訳ですね。それに追いつけ追い越すために、明治以降、いろいろ日本は無理をする訳です。何度か戦争をしたのは追いつくために無理をしたからですから。

敗戦になったら、今度はまた、アメリカ、その他の西洋文化が急に入ってきた。占領下ですから、同化というよりは、向こうの文化を一方的に導入して、その後ろにくっついていくしかなかった訳ですね。今では、日本の文化のレベルも上がってきて、今ここで外国の文化とも更にうまく交流できれば、対等でそういうものが奈良時代のようにもう一度融合して、日本の最近代文化というものをつくりうる状態の基礎がほぼできかかったなというような時代ですね。

したがって、交流国家と申し上げたのは、世界の人々とどんどんそういう文化的、経済的に社会的な交流をして、奈良時代のように日本の文化、今度は何も中国だけでなくても、アメリカも南米でもどこでもいいですから、そういうところと交流して日本の独自性を失わずに、新しい日本の文化を育成すれば、こういう交通の接点のところだから、世界的な優れたものができるかもしれません。そのようなことを期待して、日本を世界的な交流による文化国家にするということが、何か私は日本の国の理想のような気がしますけども、そういう時期が来ているなという感じがいたします。

（座　長）

ほか、いかがでしょうか。

（向井委員）

ホンダのデーラーをやっております。そのほかに海外の自動車の流通をやっております向井ございます。中部経済界では須田先生といつも我々心酔している一人でございます。

私も東京にずっとおりまして、ＪＲ東海を 18 年間利用してきました。さっきおっしゃったように金曜日に帰り、月曜日に出勤するというような形を 18 年間やってきて、東京の経済界でやってきた中で、帰ってきて自分が事業をやっている創業地において、ものすごい格差というんですか、さっき情報格差とか、それが人間の育成に格差をすごく感じて、経済界としてどうお手伝いしてやればいいかと考えています。先生がおっしゃるように中学、高校の一貫教育というのは、我々の企業ではまだ教えてあげることは難しいと。

しかし、一方では、ある高校にうちの技術の人たちが行っているのですが、1 年間が経ったので、もうよろしいでしょうかと言いながら、２年、３年と続いて、なぜそんなにと言うと、あなたの会社は自動車の世界の最先端の情報を伝えてくれて、生徒はそれを目の当たりに見る事ができると。我々企業がお手伝いできる事はたくさんあると。会社でやっている経営品質なんかも結構役に立つのです。高等学校の校長先生の中でお話をさせていただき、校長先生からは、企業の経営品質というのはこういうふうに取り組んでいると感心された。

ところが、なかなか先生の目線と我々企業人が求めるギャップというのは、ものすごく感じている。たまたま山口副教育長に私がここに引っ張り込まれまして、この三重県教育ビジョン創るための４年間関わらせてもらいました。そうすると、また、この間お越しになったので、私の役割は終わったんじゃないでしょうかというお話をすると、いや、今度は実行部隊でお願いしたいと。そこで、私は何をすればいいかという事で、いろいろと考えた中で、書類を作って学校にいる子どもたちと１回接してできないだろうかというような事を考えています。まだ、三重県の財界では、あの（海陽学園）ような学校を作る事は難しい。また、私もホンダ学園を創って、その理事として、生徒たちに対して、技術者である前に人間であれという事で、基礎教育を徹底的に教えてきたのですが、そういう企業が関わってやれるシステムの中に何かヒントがあればと思います。海陽学園を創られて、このような点について、もしご指導いただければ幸いです。

（須田講師）

１つは、今おっしゃられたように、企業が望んでいる教育というものと、学校がやろうとしている教育の接点が、さっき言ったように必ずしもシームレスになってないのですね。学校というのはどうしても県の場合は、高校が中心だろうと思いますが、高校の教育というのはどうしても大学の受験を意識した教育になりますね。受験用の教育は企業の望んでいる教育とは同じではない訳ですよ。したがって、企業はいきなり社会で役立つような社会性とか統率力とか、あるいは実行力ですね、国際的ないろんな力とかそういうものを要請されている。

ところが、高校のほうは大学の入学試験にある科目でいかに良い点を取るかと、実際上はそうなってるんですね。やはり、進学率が高くなるということが一番高校として大事なことですから。そのギャップを埋めないことにはどうにもならない。

極端に言いますと、今のようなことをやるには、地方でこういう学校ができれば一番よ

ろしいですが、おっしゃるように、そうできることではないかもしれません。その場合、やはり今のすべての学校がこうなればいい訳ですね。そのために今の受験制度をそろそろ変えてかなきゃいけない時期が来ているのではないかと思うのですね。
これから学生の数が減りますと、高校生を大学に全員入学させることが可能です。可能ですが、今のように大学の格差がこれだけ大きいので、一流大学の入学試験は、これからも盛んになると思いますね。例えば、入学試験というものをこれから止めて、学生全員、地元の大学に行くようにすると。例えば三重県の人には、東大を受けさせないと。全部三重大学に行けと。その代わり、卒業生の資格は全く同じに扱うと、一定の成績があれば。そうすれば何も行く必要がない訳でしょう。そういう風に切り替えるのが良いと思うのですが、そう簡単には出来ませんよね。
　やはり長い目で見ると、この今の日本独特の受験制度を変えないことには、具合悪い訳です。しかし、それは急には不可能です。だから、なるべくこういうような学校をもう何箇所か創って頂いて、問題提起をして、そして皆さんでそういう大学の受験制度まで遡って、教育は何かと考えるようなムードを作るようなことをしていかないと、なかなか上手くいかないと思いますね。
　さしあたり、さっき私が申し上げたように、学校と企業との連携が大切であって、学校でこういう教育をもって教えてほしいということを要望されると。学校のほうも企業の方に来て、就職のことをお考えになる際に、どういうふうにしたらいいかお聞きになられている。そのあたりからアプローチしていくかないでしょうね。最後はやっぱり受験制度を変えないと、どうにもならないと思います。
　今、学校と企業の連携を密にすることと、もう少しこういう学校をあちらこちらに創って頂いて、みんながこの問題をお考え頂くきっかけ作りをするのがどうも一番早いような気がします。
あるいは企業で場合によれば、一定の高校か何かに寄付講座みたいなものを作り、企業の方からも人が行って臨時の教育をされるとか、そんなことがあっていいのではないでしょうか。学校の先生を企業から出すとか、その逆とか、そういうことあっていいのではないでしょうか。
（座　長）
　ありがとうございます。ほかにいかがですか。
（土肥委員）
　県立松阪高等学校校長の土肥と申します。よろしくお願いします。
印象に残った言葉が２つあって、１つは、群れない子どもの話をされましたね。私もそれをものすごく感じるのですが。今の日本の社会の中で私が伝えたいのは、群れられない子どもというふうな感じがあるのです。なぜかというと、うちの隣の小学校、もうパラパラしか子どもがいない状態です、教室の中に。群れることすらできないという、そういう状況が今、日本の社会の中で起きているのは事実ですよね。

そういう中で、もうちょっと何かお考えがあるのかなというのが１点、聴かせていただきたいのと、もう１点は、エンジニアを早いうちから教育したほうがいいというふうなおっしゃり方されたのですが、おっしゃるとおりだと思います。実は私も工学部なので、そういうことに非常に興味があるのですが、例えば中学校、高校レベルで技術的に興味があるないというのはなかなか難しいと思うのです。そういう意味で、高等学校において、いろんな幅ができて、そこから分かれていく、そういう風に教育システムがなってきたような気がするのです。

さあ、これをまたバックへ戻していって、できるだけ早いうちにそういう教育をということになってくると、また難しいような気がするので、その点についてもうちょっと詳しくお聞かせ願えたらとお願いいたします。

（須田講師）

今の前段のほう、これは日本の大きな社会問題でございますね。つまり中山間地帯というものができていった場合に、段々そこではコミュニティが維持できなくなり、集団離村が起こり、最終的には町の、あるいは村の存在はなくなっていく訳です。これは日本の大きな問題で、これを無くするということが大きな課題なのですが。

私は地域の経済を活性化して、まんべんなく地域が発展できるようにするために、これまでは、道路とかその他公共投資の役割が大きかったのですが、観光をもう少し一所懸命やれば、まんべんなく人が行って、こういう格差が無くなるのではないかと思いますが、それは別の話ですが。

例えば、これを無くするとしても、これは今の状態では早急に無くなりません。無くすためには、群れるような一定程度の人数が集まった教育をするしかない訳ですね。そうすると、やっぱり私はある程度全寮制度みたいな制度をもう少し、若干これは公費がかかるかもしれませんが、普及させて数十名程度、一定の規模以下の学校というのは無くしていって、その代わり全寮制度で一定の期間泊まらせて、そして、みんなで一緒になって集団生活をさせる。戦争中、集団疎開でみんなそれやった訳ですから、全員が。いろいろ問題が起こりました。あのときは食べ物がないからいろんなトラブルが起こる訳ですから、食べ物がたくさんあったら、トラブルは起こりません。集団疎開のトラブルは全部食べ物に起因しているタイプになる訳です。今いっぱいある訳ですから、それはない。

やっぱりそういう全寮制度、外国はそういうところあるそうですね。ある一定程度の生徒規模のところにまとめて、そこで集団生活をさせてやっていくと。その代わり休みのあり方とかいろいろ考えなければいけませんが、それしか僕はないのではないかという気がするのです。やっぱりどうしても群れる子が必要です。

また、そんな寺子屋みたいに先生が複式学級で１学年１人ぐらいの生徒を教えていても、集団教育にならないですよ、個人教授ですよ、それは学校じゃないですね。僕は子どもの頃にそれをやったら、その人々には将来、いろいろな歪みが残る。集団生活しなきゃいけない。少なくとも 4､50 人規模程度の集団生活が必要ですね。

私は地方の中山間地帯の学校というのは全寮制度にして、先生が集団的にやるとか、家族がそこにときどき定期的に面会に行くとか、ある程度これは公費が要りますが、しばらくはそれしかないと思いますね。同時に、後は政策をはっきりさせて、中山間地帯を無くする努力ですよ。あるいは､そういう所を廃村にし、まとめてコミュニティをつくり直すとか。東北の災害地なんかそれをやるチャンスだと思いますけど。それをやっていかないと、学校生活が１人や２人では学校じゃないですよ、家庭ですよ、単なる。家庭ならいいけど、先生は家族じゃないですから、そこで、やっぱりコミュニティを作らない、それしかないと思います。これは極論ですが。三重県もありますか、そういう所は。

（土肥委員）

一つだけ、昴学園という全寮制の高校があります。

（須田講師）

先生がおっしゃったように、生徒の数が少ない学校も相当ありますか。

（土肥委員）

段々出来てきて、この平成２３年度をもって終了する学校もあります。

（須田講師）

一学年に一人とか二人とか、三年生は誰もいないとか、そういう学校があるらしいですね。一学年が全部欠落しているような学校が。それでは学校教育になりません。集団教育、社会教育をするところでしょ。一人や二人で朝から晩まで顔をつきあわせてやっていたら、それでは教育にはなりません。村を集める方法と生徒を集める方法を考えるしかない。

（山口副教育長）

日本のリーダーということで、海陽学園の話も出たが、今のトップ層は、イギリス紳士ではないが、尊い方には、“最後に”とか、“社会貢献とか地域貢献”とかいう思想を、高い地位や公職に就いている人には最初に犠牲を払うという心構えを持ってもらえるようなトップリーダーを養成する事を是非、海陽学園でお願いしたい。

（須田講師）

（海陽学園では）今のリーダーではなく、かなりそのようなことを念頭に置いており、要するに庭掃除をするようなリーダーを養成しようということで、「質実剛健」をかなりこの（学校の）中に入れています。例えば「健全な肉体」「強靭な意志」などを言っていて、それは大事なことなのかなあと思います。ただ、リーダー教育とあまり大きな声で言わない方が私はいいと思います。子どもが最初から自分をリーダーだと思っては困るし、鼻持ちならない子どもができるから。そこはやはり上手にやっていかないといけない。

（山口副教育長）

子どもたちは、親を見ていてそうなのかも知れないが、将来の仕事や生活に対して夢が持てない。昔は何か夢を持てるような職業がありましたよね。例えば、私が小さい頃はＳＬに乗る機関士がすごいなあと思っていたのですが、そのような仕事への憧れなどを子どもたちに持たせるにはどのような方法があるかということ。

（須田講師）

それはおっしゃるように、時代とともに憧れる仕事は変わります。新幹線の運転士になりたいという子は今でも相当数います。昔から「運転手は君だ、車掌は僕だ」という歌がありましたが、あの二つに憧れた訳です。今じゃ大きな声で言えなくなるのは、リニアモーター（カー）をやりますが、あれは運転手がいないのです。運転手が要らないし、「運転手は君だ」といっても、もう運転手にはなれないのです。ということは、運転士を前に置いといても役に立たない、変電所で制御するんですから。保安要員を残すだけなのです。そういう状態ですから、将来、君は電車の運転手になるといっても、リニアになったら無くなりますからとなる訳です。変わってくるのですね。そうしたら変電所で電車をオペレートする人が今の運転手の役割を果たすのです。「変電所の運転手は俺だ」って歌はないですよね。そうすると子どもに希望を持たせるものが何かっていうことが、そこに確かにでてくるのです。そのような派手なというか、見映えのするものではなしに、社会の地道な底辺に立ってボランティアのような努力をする人が、本当は尊い仕事だということを教えれば、やはりそれになりたいという人はいるでしょう。職業で、今後一番尊い職業、まあ尊くない職業というのはないが、職業のどういうところが尊いのかということを教えることによって、自分たちのやりたい仕事をみんなで考えてもらうやり方しかないのですね。だから、鉄道に来る人に対しては、そういうことを言ってやらないと、将来「約束が違うじゃないか」と言われても困るのです。やはり、職業とは何かということを教育することによって、子どもは自分がいいと思うものがあったらそれが正しいんです。人によってみんな違ってもいいのです。子どもの頃に、小学校のクラス会か何かで、先生が「将来何になりたいか」って言うんですよね。小学校５年生か６年生の頃に。まあ、今でいうとキャリア教育の一環のつもりで言ったんでしょうね。私は電車の車掌になりたいと言ったんです。そうしたら、教室中が笑うんです。当時はみんな軍人にならなきゃいけないという時代だったんです。そして軍人になることを期待していた訳なのです。先生は私にどうして軍人にならないのかと言いましたから。ご承知のように、僕は体が弱いから軍人が務まらないと言ったのです。みんなが笑って、僕を馬鹿にして終わりになったのですけどね。しかしそれは誰も実現しなかったのですね。私は電車の車掌になりましたから、目標を達成したのは私ぐらいなのです。私が電車の車掌になった時に目標を達成したと思った。それは小さい目標かも知れないですが、それでも達成感がある訳です。何か新しいものを自分で見つけなきゃいけない。そうしたらどういう職業があって、どんな職業が社会的に役に立つかって教えて、みんなで考えるしかない。昔は強制的に「軍人」だと言わせたのですから。ですから、自分で将来を見つけるための材料をどう提供するかです。

（座　長）

そういう意味では講演の中で先端技術のことに少し触れられていましたけれど、伝えて応用する力などをつけるということも大事ということですね。

（末松委員）

今日はありがとうございました。先ほど土肥委員の話の中で「群れない子どもたち」というのがありまして、その中で集団生活の人数というかコミュニティの、最低でも一クラス４０人から５０人という人数の集団生活というお話をしていただきました。今、全体的に子どもが減っていますが、それよりもきめ細やかな教育をするという方向性があり、少人数学級の推進を小学校、中学校で進めているところで、本市もそのような流れできています。一つのコミュニティの人数が非常に大事だと思っていますが、私たちは４５人で一クラスの時代だったのが、今は少しでも減らそう、減らしてほしいという保護者の希望が多いです。そのあたりのところをもう少し、集団生活を身につけるための最低の目安というものについて、もう少しお考えを聞かせてもらいたいと思ったのが一点です。もう一点はグローバル感、日本から見た海外ではなく、海外から見られている日本というものが非常に大事だ、これから企業の中でやっていかなければならない中でグローバル感というものが非常に大事だというお話をいただいたと思います。本当に私も大事だと思っており、国の政治を見ていてもそういう気がするのですが、そのあたりをもう少しお話を聞かせていただきたいと思います。それにつながって、国家目標と国家政策というものが大事になってくると思うのですが、教えていただければと思います。

（須田講師）

人数は４５人じゃなくてもいいと思います。それは今は無理でしょ。私は最低３人だと思います。なぜかというと、一人では「社会」になりません。二人でも「社会」になるかもしれないけれども、ならないです。ＡとＢだけですから。ＡとＢに加えてＣというのがいると、そこに社会ができます。対面した二人だけでは社会にならない。３人以上必要です。本当のことをいうと、今は３人（兄弟）なんてむしろ少ないでしょう。ですから家庭において子ども同士の社会が形成されていないのです。そこにまた一つの大きな問題点があるのですね。１対１の二人では社会にならない。一人でも社会ではありません。３人以上で何人までかということになりますが、４、５０人、まあ４０人が限度でしょうけど、それは１０人でも５人でもいいと思います。二人以下ではだめだっていうこと、これだけは、はっきり言えると思います。それ以上、例えば４０人以上、６０人や７０人になると今度は大衆的になってしまって、みんなが共同風呂に入っているような感じになってしまうので、これもよくない。従って私は二人以上、２、３０人くらいまでのところだと思います。末松委員から海外のお話が一つあったけれども、海外の子どもが日本をどう見ているかっていうことも知る必要があるんです。案外それが知られていない。海外の子ども、ドイツやイギリスの子ども、或いは中国の子どもが日本をどう見ているのか。日本の子どもについてどのような見方をしているのか、それをやっぱり見て、その人々が日本についてどういう気持ちを持っているのか、あこがれの気持ちを持っているのか、或いは蔑みの気持ちを持っているのか、何とも思っていないのか、多分、何とも思っていないと思いますよ。そこのところが大事なので、それくらい日本の情報は外国に行っていませんから。

やはりそこのところが大事なので、海外の子どもに日本を認識してもらったら、彼らはどんなメッセージを送ろうとするのか、それをやはり先生方が海外に行かれたときに是非見ていただいて、教えていただきたいという気がします。海外に行ったら日本で教えておられるのと同じような小学校や中学校、高校の生徒にお会いになって、「日本を知っていますか」と。「知らん」というのであれば、日本はこういう国だよ、どう思いますかということを問題提起をしていただく。中国の子どもは日本をこう思っていますよというのを日本人に教える。子ども同士が交流する。そういうことをやっていけばと思うのです。そのへんのデータが非常に不足していて、海外の子どもたちが日本をどう思っているかということを先生方は調べているかも知れませんが、あまりそういうことは文献で接することができないんですけど、それがポイントじゃないんでしょうか。おそらく鈴鹿の市会議員の先生とか市役所の方々が、海外事情を視察されるでしょうが、是非一つ海外の子どもが世界に対して、日本に対してどういう意識をもっているか、そういうのを是非見ていただきたいし、知りたいと思う。海外の視察は県教育委員会ではやっているのですか。

（山口副教育長）

予算節減の折、そういう予算がどんどん減らされており、プライベートで行っていただくということなっています。

（須田講師）

皆様方が教えておられる年齢の子どもの状態を是非見ていただいて、それと日本の状態とをよく比べて伝えていただければ随分違うでしょう。私たちの子どもの頃はほとんどそういうことがありませんでしたから。日本は「鎖国状態」でしたが、今はそうではありませんから。子どもは結構、親に連れられてハワイに行ったりします。ハワイだけじゃなく、もっと近くのところも見てもらわないと。

（松岡委員）

今日は大変すばらしいお話をありがとうございました。その中で、これからの教育について提言をいくつかいただきましたが、海陽学園というものは今後もっとたくさん展開していくことが難しい中で、基礎学力を充実させるとか先端技術を導入して利用する能力を高めるとか、そういうことを深めて行くために私たちが当面できること、それと学校と企業の連携がないということでそれを深めて行くために、まず私たちが具体的に何をしたらいいと考えられているのか、そのあたりをご指導お願いしたいと思います。

（須田講師）

子供を持っている親御さんと学校とはＰＴＡなどがありますから、年に何回か必ず集まり、定期的に連携します。つまり子どもを持っている親御さんが学校と連携するというシステムがあります。ところが企業の経営者の方については、それは中小企業でも大企業でもいいのですが、企業と学校との間にパイプはほとんどありません。まあ、やっているところがあるかも知れませんが、少なくともそのようなものが常時あるわけではない。それでも、例えば、ある企業に就職した高校生があるとします。そこと企業の経営者とが時々

学校を訪問したり、学校の人が企業を訪問したりして、卒業生がどういう状態にあるかということを知っていただき、こういうところがうまくいっているとか、うまくいっていないことがわかるとフィードバックできますよね。そういう場を定例的に作るようにしたらどうかと思います。父兄からではなしに卒業生からだと思いますけど、そういう人が学校を卒業したあとも学校との連携をつなぐようにしていくというシステムです。学校と父兄との間にはそのようなシステムがありますよね。それをもう一段上のランクのシニアのところでそういうシステムをつくる。それが一番手っ取り早い方法だし、大事な方法ではないかと思います。そんな感じがします。特にまとまった卒業生のいる学校だったら、或いは企業だったらそれがやりやすいと思うので、まずそういうところから先手を打ってやっていただくということではないでしょうか。

（奥田委員）

お話の全てがその通りだと思った。教育の方法の話の中で、ここまでの意識が教員の中には生まれません。言われたように、目の前の大学入試、この前の本校のカリキュラム委員会という教育課程を決める会議では、私立の文系に行く子に数学など教えても仕方がないとなります。でも基礎学力が大事というあたり、その時に私を含めて何人かが、例えば、社会に出る以前の大学でも、基礎的なことができていない子を大学に送るという自体が高校はだめなんじゃないかといっても通らないです。勉強する気のない、数学が受験に無かったり、数学の勉強がいらない子は数学に対して一生懸命やらない、そういうことが教員の中から出てくるのが現実です。例えば、教員自体にコミュニケーションを取れないような、「群れられない教師」がいます。例えば、私が直面している問題で、学校に出て来れない子がいますが、その子の状況をみんなで把握して、養護教諭も含めてみんなでやっていきたいと言っても、その担任がそういうことに対して一緒にやっていこうとしないという現実がある中で、この教育の方向をご指摘いただいて、半分は元気が出たんですが、半分は自分の職場を見ると、二十年、三十年、もっとかかるんじゃないかとすごく情けない思いをしています。すごく思ったのは、特に普通科の子どもたちに、その子の持っている能力を引き出してあげる力は教員に一番必要かなと思います。前回の会議にも出ましたが、普通科の子どもたちは中学でも進路がわからない、高校に入って来たって職業探しをしている。それではとにかく大学に入る、ちょっと化学ができればそういう系統に行くことしか考えない、それは教員の責任だというのは強く痛感しました。感想だけですが。

（須田講師）

今、先生がおっしゃった冒頭の問題はかなりの学校に当てはまります。受験に関係のない科目は教えないし、生徒も受験に関係のない科目は学びたくない。数学はそこに書いてある数字や手法を覚えるだけが数学の勉強ではなく、数学的なものの考え方、解析力を養うためにあるんです。これは受験のために一番必要なことです。私は法学部ですが、法律を覚えていても仕方がない、全て六法全書に書いてあるじゃないかと思う訳なのですが、それは違うのです。法律的なものの考え方、「リーガル・マインド」っていうのですが、こ

れを勉強することがポイントです。数学も例えば問題を証明していく過程というのは、数学的なものの考え方、つまり世の中のものの考え方、数学を通じて論点の立て方を勉強する、数学という仮面をかぶった勉強の仕方を学ぶことなのです。そう考えれば受験をするためには一番必要なことなのです。それが形式的に証明問題になったり、公式を覚えるということになっているだけなのです。そういうふうに考えていくと今の議論は起こり得ないものになると思います。先生方も自分の生徒の成績をあげたいとなると、受験に関係のあるところだけ教えたくなります。生徒も数学がないところを受けるのになぜ数学をやらなければいけないのかということになる。そうではなくて、数学を勉強することによって身につく、数学的な解析力、ものを分析する力はあらゆる受験に必要です。それを数学を通じて学ぶと一番学びやすい面がある。公式だって証明問題だってそうです。それが数学だと思うのです。だから $a^2+2ab+b^2$を覚えるのもいいかも知れないが、なぜそうなっているのか、展開したらそうなるのですが、展開したらそういう式ができるという、そういう過程が大事なのです。それは技術を学ぶのと一緒です。ノウハウなのです。そう思えば、私は数学が大嫌いでしたが、数学に対する疑念は解けました。そう思ったら、最後はしょうがないなと思いました。それに気がついたのは法律学です。六法全書に書いてあることを覚えても仕方がない。リーガル・マインド、ものを処理するときの法律的なものの考え方、これは学ぶと社会的に非常に重要な技術です。そう思ったらいいのではないかと思いますが。先生方に釈迦に説法でしょうけれども、先生方も一つそういうふうに学んでいただければありがたいです。一部の生徒や一部の先生が言うように、受験にこないものは学ぼうとしない訳です。美術はちょっと違うかも知れないけれども、美術だって情操を養うということは、人間性を陶冶するということですから、面接の時に美術が得意な人っていうのはやっぱり面接がうまいそうです。美術も音楽も何も関係がないということはないのです。そういう総合的な技術を養うとなると、音楽も美術も数学も要るのです。特に数学はものの考え方、立て方を学ぶうえで一番の技術です。遅すぎましたけど、私はそんなことに大学に入ってから気づきました。これに中学生の時に気がつけば、私はもうちょっとよくできた子どもになっていたと思います。

（座　長）

海陽学園に関連してですが、基礎学力をつけ、専門性を身につけながら、社会性を培うという理念が非常に同感するところです。「シームレス」の話もありましたが、学力についてはある程度、中学１年生の時、２年生の時、高校の時というふうに、シームレス化して目標を立てることというのは、どこの高校でも明文化されていると思うのですが、社会性とか人間力ということに関すると、小学生の段階、中学生の段階、高校生の段階で、段階的に目指すべき目標がなかなか明文化されていないのが実情だと思います。そのあたりについて、例えば小学校の段階ではどのような社会力を身につけるべきだという段階的なことについて何かお考えがあればお伺いしたいというのが一点です。もう一点は海陽学園の場合にはどの段階でどのようなキャリア教育、キャリア・カウンセリングをしながら、「あ

なたはこの分野がいいですよね」という進路の方向性の指導をされているのか。最後は海陽学園が名門とされて、人が集まる学園になればなるほど、「金帰月来」の傾向を防ぐために作られた学校なのですが、優秀な人が結局は東京に行って、東京の企業に就職してしまって、せっかく地元に定着するために作ってもらったのに戻ってこないということになりかねないためにも何か方策や地域の活性化ということのアイデアがあればお聞かせいただきたいと思います。

（須田講師）

海陽学園はいずれは大学をつくり、海陽学園の大学に進んでいただいて、地元に定着した教育ができるところまでに本当はもっていかなければならないと思います。最初はできませんから、そのまま他の大学に行きますが、海陽学園からそこに教育を委託しているくらいのつもりで、十分フォローしてやっていきたいと言っておりますから、ちょっと時間は要りますが、そういう方向にしたいと思います。もう一つ、冒頭におっしゃった「段階」の話ですが、小・中・高校で変わってきます。小学校はどうしても基本的なこと、中学校はその中間、高校に行っても就職が近づいてきた場合には専門的にと、段階によって切り替えがあり、場所によっても、地域によっても，学校によっても違うと思います。ですから、階段状のシステムのようなものを教育委員会が考えて、指導の方針を作ったらいいと思います。やはり基礎教育が一番大事ですから。小学校を基礎に中学校でさらに基礎の要素を入れて、高校は専門教育に特化していく。その段階の切り替えを中学でする。一言でいうとそんなことだと思います。

（座　長）

本日は貴重なお話をありがとうございました。須田相談役にもう一度大きな拍手をお願いします。

＜　休　憩　＞

（座　長）

それでは時間になりましたので、審議に入らせていただきます。事項書の４番の「キャリア教育の充実に向けた具体的方策」という第２分科会のとおりに入っていくわけですが、先ほどの休憩時に最新のデータに直していただいた資料が配付されましたので、そちらにあるスケジュール案をご覧いただき、進め方の確認を少ししていただきたいと思います。本日は９月上旬のところにある「第２回目」になります。第２分科会は、１０月の中旬に位置づけられている第２回全体会での「具体的方策について」というところで審議状況の中間報告をするということになりますので、今からの１時間と９月の下旬に予定している３回目で議論いただきました内容を１０月の全体会で発表していくという流れになっています。非常にタイトな日程となっており、本日も１時間という限られた時間ではありますが、本日の審議内容と３回目も同じと考えていただき、３回目の審議がよりスムーズに行

くために、多方面からの意見を出していただけるよう今からの時間を位置づけていただければと思います。前回は発展段階を踏まえたキャリア教育の必要性やインターンシップを効果的に進めるためには企業とどのような連携をしていけばいいのかということで、具体的なご意見をいただきましたので、本日はより皆さんの認識を統一し、より議論を深いものにするために、事務局でそれに関連する資料を作っていただきました。その件につきまして、事務局の方から説明をいただければと思います。

＜説明　（齋藤室長）＞

（座　長）

資料については、今質問があるところは質問していただいて結構ですが、第３回の審議をしていただくにあたりましても、データを見ていただきますと、この切り口から聞きたいという項目も出てこようかと思いますので、次回に向けて課題を新たに見つけていただくうえでも、ご活用いただけたらと思います。検討課題や方策を提案していただくにあたり、見ていただく時間も必要だと思いますので、十分目を通していただきながら耳を傾けていただければと思います。先ほど全体スケジュールで紹介させていただきましたが、これからの時間と第３回で皆様からご議論いただきました内容につきましては、全体会で報告してまいります。前回に皆さんに配付をしていただいた資料につきまして、別の切り口から４つの柱に整理し直しまして、提言をしていただいています。それぞれの柱につきまして、皆さんからいただきました新たな課題、それに向けた具体的な方策に分けて整理をいただいたものが本日配られている資料３ということになります。全体会はこの資料３の４つの柱を軸に整理し提言をしていきたいと考えていますので、この切り口で皆様の考えを整理いただければと思っております。できるだけこの４つの柱に従って、より多くの新たな課題も出していただきたいと思いますし、それに向けたそれぞれの具体的な方策ということも対応して埋めていきたいと思っています。今は１の教育活動全体を通じたというところが活字的には面積が大きくなっています。前回もこの部分を中心に議論をいただいた結果ということが見えると思いますが、２番の「適切な就職支援」と非常に事務局も振り分けていただくのに苦慮されたのではないかと思われる部分でもありますが、比較的就職、出口に直結したもののみ振り分けていて、継続して必要な物に関しては１番に入れてあるという形で見ていただければと思います。いずれにしても、３番と４番に関しては、かなり余白の面積が多いということはあまり議論がなされていないということになると思いますので、そのあたりを少し意識していただいてご意見をいただければと思います。１番に関してもまだまだ議論をしていただく点があると思いますので、すべての４つの柱について議論をしていただきたいと思います。

（向井委員）

経済界の出身として、前回はビジョンづくり、今回は実践をしていくと言われておりましたので、経済界として何ができるかということを私なりに考えさせていただき、おそら

く小学校や中学校についてはキャリア教育で、今までのものを少し拡充すればいいと思います。私は地元の校長先生をよく知っておりますが、高校は当然、義務教育ではありませんから、そこで進んで就職する方に対して、経済界がある程度、人材育成などのカリキュラムをもっと簡単にしてやらせていただいて、１年生くらいから就職も全部引き受けるというくらいのことが実験的にできないだろうかということを考えています。校長先生や教育長とお話ししながら、学校に行ってそのような形にしたい。松阪高校のように大学に行く人がたいへん高い理想を持っているというのもありますが、企業人がやるとしたら高校生から就職を考えている人に取り組んでいく。離職率３０％というのは経済界の統計からみてごく普通であり、５０％くらいあっても不思議ではない。高校生は奥田委員のところ（＝相可高校）のように進路が決まった学校だったらいいですが、どんどん変わっていいんじゃないか、キャリア・アップしていっていいんじゃないかと私自身は思います。私たちとの段差が大きく感じられます。学校は当然１００（％）が理想でしょうけど、そういうことがあります。比較的現場を確認されていないということで、できれば企業のほうでそういうふうにやって、もし成功して、三重県の教育長からこれはおもしろそうだ、やってくれと言われたら、こちらの教育担当は何十人かの部隊を組んで、全部学校のカリキュラムを一本化する。その人が行って、感性でやるというのはやめようと。三重県のキャリア教育として夢を持たせるのはどういうことかということを作っていきたいと考えているので、できれば９月から高校が始まるので高校に行って、でもちょっと外れるといけませんから、よく教育委員会の皆様とご相談して、進めさせていただいてよろしいでしょうかという資料を持って来ようかなと思っています。単純なことですが、新入社員が入ってきたときに全部教えるのは、会社に入ったらどうするかということ、これを「意識的構造」というんですけど、「意識的構造」というのはどういうことかとか、人生の成功学といって、生きる力、考える力、学ぶ力など、また鬱になる人がいるわけですから、鬱を治す方法というのは当然企業は持っているわけですから、そういうことを簡単にまとめて提供したいと思っております。我々の会社のように小さい会社でも、社員教育では、日本の結構優秀なメンバーを集めていると我々は自負していますが、そういう人材を全部活用してやってみたいと思っています。その人たちが常勤かというと、１週間に３日くらいであり、世界で活躍されたり、経営品質の日本の大賞を取った人を集めていますので、そんなことをやってみたいと思っている。この４つの項目は、全てが重複してくると考えているが、経済界では高校で就職され、第一線の現場からされる方々を確認していきたいと思っています。そんなことでお手伝いができればと思っています。今回は実行する経済界でありたいと思っています。

（奥田委員）

インターンシップは進めよう、だけど現場は教員がついていかないというのがあります。「デュアル・システム」がここにでていますが、この２、３年、教育委員会のいろいろな

事業で、どちらかというとデュアル・システムの方に金銭的にも厚く手当をしている傾向にあると思いますが、どうなんでしょうか。例えば桑名工業高校のような学校だと、企業が地域の働く子どもたちを育てられるし、デュアル・システムをやっていて、その検証のようなものと、デュアル・システムとインターンシップの関係、どちらが効果的かということを検証していますか。

（山口副教育長）

文部科学省ではインターンシップは３日間です。３日間だとほとんど、７０％は実施しているというんですけど、あまり効果がないと企業人からも学校関係者からも言われています。インターンシップをするのにも５日間は必要というのが一つあります。一度にはできないので。「手厚い」ということではありません。予算的にもデュアル・システムにたくさんお金がいっているということはありませんが、学校数が少ないために手厚くなっているように見えるということがあります。私どもとしては、デュアルをやれるのであればやっていただき、そして前回お話ししたように、「空気」とか「臭い」など職場のことを知って職業選択に入っていくのが一番いいのではないかということです。インターンシップやデュアル・システムの報告書は国でも出されていますし、県でも農水商工部と連携しながら報告書も作ったことがありますので、一応検証はしています。主にやっているのは桑名工業だけですので、恒常的に２ヶ月とか３ヶ月というのは教員にとっては負担感が出ているというのは聞いています。

（齋藤室長）

デュアル・システムが５校から増えていないというのはあります。長期間であるというのは、教員もたいへんですが、効果としてはインターンシップと全然違うと考えています。

（座　長）

効果が違うというのは、デュアル・システムの方がより求めているものに対する効果が高いということですね。それであれば、逆に手厚くなっている原因が、手を上げる学校が少ないということであれば、そのことに関しての現状のどこの部分をクリアすればいいのでしょうか。例えば桑名工業だと継続してきているので、受け入れ企業数が確保できているとか、先生のモチベーションなどいろいろあると思うのですが、何を克服すれば、桑名工業高校のように成功したデュアル・システムがより全県に広がることができるのか、そのあたりについての実証研究はされているのでしょうか。

（山口副教育長）

桑名工業と地元の企業との互いの信頼関係ができており、それに商工会議所が入ってやっています。同じ工業高校であっても、四日市工業や四日市中央工業がある四日市は企業数がものすごく多いんです。いつでも行けそうなのですが、当該商工会議所がインターンシップ、特にデュアル・システムに対して消極的なんです。四日市工業は売り手市場です。四日市工業の生徒であれば、ほしい、ほしいといって、就職には困らないんです。四日市中央工業は離れたところにあるので地元の企業といっても、なかなか中心部に行けないの

で、ハンディキャップがあります。このままではいけないので、四日市中央工業はインターンシップを長期化させようと今努力しています。それぞれ置かれた地域の条件があります。津工業も、工業高校はどちらかというと売り手市場ですので、困らない。そういう中で桑名工業は学校が荒れている中で、どうやって子どもたちを一人前にしていくかということでデュアルに取り組んだ。松阪工業も伊勢工業もほとんどデュアルには手がついていません。それぞれの学校の地域事情があるので、インターンシップやデュアル・システムをどこでもそのまま同じルートでやれる訳ではない。まず言えることは、企業と学校の信頼関係です。

（奥田委員）

例えば桑名工業を成功例というときに、桑名工業は荒れていたので多分危機感があったと思うのです。その結果、やっぱり地元企業、デュアル・システムに行ったところに就職することが増えたのでしょうか。

（山口副教育長）

はい、増えました。全部へは求人票を出さないけれども、桑名工業さんから採りたい。デュアル・システムに来ているこの子だったらほしいという関係ができている。

（座　長）

地元志向で、地元に就職したいと思っているような学生が通っている高校であれば、類似したニーズはあるということですね。

（向井委員）

土肥委員が言われたように、松阪高校のような進学校であるなら、大学生でほとんど８割、医学部か工学部以外はほとんどアルバイトをすると思うのです。そういう点で、そういうところにキャリア教育は必要があるのかと思います。話だけならともかく、企業に出てくるのは。大学を目指しているのだから、基礎をしっかりとやって、大学に入ってからやってよと思うわけです。本当に基礎を学ぶ高校で、高校生は４０人採ったとしても、学校推薦の事務員さんは２人採るだけなんです。それも商業科だけ。あとは整備短大や普通の総合職で入ってくる生徒ばかり採る。万が一、高校で入ってくるとしたら、普通高校でも整備短大まで会社は援助することができるのです。でも、その子は整備専門学校を２年間出てきて、基礎をやるときに私は何も持っていないからほとんど修理させてくれない、そういうふうに言われると離職していくと。キャリア教育だけだったら難しいですよね。でも、我々が高校に行って、就職するのだったら１０人を引き受けますということであれば、就職率は一気に上がってくる。そして離職率も少なくなる。これは企業は実利をお互いにとっていくし、社会性を高めにいくからです。大学に行く人に企業はあまり関わらなくてもいいのではないか、大学の時代にアルバイトでしっかり経験していると思います。

（真伏教育長）

普通科高校にはで進学率の高いところと、そうでないところがありますが、個人的には普通科高校の中で、専門的なところを強化したり、もう少し職業的な意識を持ってカリキ

ュラムをつくるなどした方がいいのではないかと思っています。そうすれば、子どもたちが離職することが減るのではないかと思う。一旦離職してしまうと、今の世の中ではなかなか正社員になってキャリアを積んでいけません。そのためには、職業教育をしっかりするような学校に切り替える。一方、進学するのであれば、進学に必要な授業をどんどんやって、進学が達成できるように、すみ分けしたらどうかと思っています。

（向井委員）

グローバルな世界が来て、アメリカの大学だったら、大学で最終的に学んだことをちゃんと確認します。そうでなければ卒業はできません。日本は全部卒業できます。ちょっと異常です。三重県独自の教育をするというなら、教育長がおっしゃるように極端な例ですが、もっと企業人が高校で就職する学校にターゲットを絞って教育をするんです。全部の高校でしてほしいといっても、企業はなかなか受け入れることは難しい。整備短大に高校から入ってきて、キャリアを結んで、ちゃんとそういうところに行かせます、資格も取らせます。２級を取れば専門の大学を出たのと同じですというところまでなら金銭的に支援できます。でも、それが全部（の高校）になると無理です。そうすると１年生から関わって、モーターサイクルの世界が好きだ、電気の世界が好きだ、商いが好きだという子には夢を与えることができる。そして我々経営陣も、我々自身が教育をして同じレベルでその人たちを教えることができます。経済界もおそらく、そういう点では拡充していくと思います。今、会社で言っているのは、おそらく２５％が近いうちにすべて外国人になる。日本人である必要なんか何もない。それだけ差がつくんだったら、我々経済界は資金的にも、教育につながるならそうしたい、一度一つの高校でやらせていただけないか。来年はするよと言われたら、させてもらいたい。三重県独自の教育でどれくらい時間が取れるかわからないし、夏休み１０日間であっても、ただで働くというのはいけないので、夏休みのお小遣いをちょっとくれたらいいなという、「払う」というしくみも考えていただけませんか。

（山口副教育長）

アルバイトとインターンシップは違うのですね。アルバイトはお金を儲けるのがそれほど甘くないということをしっかり教えなければならない。報告書で出ているのですが、大学でインターンシップをしている人とアルバイトをしている人は同じじゃないか、アルバイトをインターンシップに代えたらいいじゃないかといいますけど、その心構えが違うんです。お金を稼ぐことがいかにしんどいかということをアルバイトはその日から教えなければならない。インターンシップはまずは職業を見ることから入るので、目的や終点が違います。アルバイトはお金を稼ぐため、何かを得るためにしますが、そのあたりもきちんと検証されているので。向井委員がお金を払って長期休暇で受け入れるというのはうれしいですが。そこでしっかりと指導して頂ければいいとは思うが、時給６００円払っているのでしっかりやってくれなければ困るというふうに徹底してやっていただければ、いいのかもわかりませんが、その職業を嫌いになる可能性もあります。

（向井委員）

むしろ嫌いになって就職の変更をしていただく。基本が大事だということで大学に行きたい、まだ高校では働くのに自信がないので行くといったら応援したらいいのです。そのような形でバックアップしていくのは家庭であり企業だと。だって基礎を作ってもらっているんですから。仮に就職を我々が全部お手伝いするとして、それが半分になってもいいと思うんです。これがＣＳＲ、社会的貢献、そういうことだったらちっとも構わない。ぜひとも、三重県らしい教育のあり方、企業は全部一律にバックアップすることは難しい。一つの実験を作ってこれを波及させるんだったら、いくらでもお手伝いします。企業側も持っている人材育成のプログラムをもっと簡易型に作ってとことん教えたい。

（奥田委員）

金銭的な代償の件ですけど、デュアル・システムを長期的に考えて行くんだったら、働いたら代価をもらえるということを、子どもたちが学ぶのはすごく大切なことだと思います。要するに、企業の一員となってその１日を働くんですから、文部科学省で一時期デュアル・システムをした子どもたちには、いわゆる給与的なものは出してもいいという議論はありませんでしたか。インターンシップは職業を知ろうという目的が多いと思うので、働き手ではないし、知るためのインターンシップだと考えれば、無給でも当たり前だと思うんですけど。アルバイトとインターンシップの関係は、働くということでは、アルバイトでも１０００円もらえるためにはたいへんだなということでいいと思うのですけど、やっぱり松阪高校のような進学校でも職業を知らなければ行く大学は決められないじゃないですか。そういうキャリア教育って絶対に必要。自分の息子も松阪高校を出たんですけど、結局、大学を決めたのは唯一良かった成績のところで、まだ、好きなところで好きな勉強をするというのならいいと思うのですが、なんかちょっと違うような。

（座　長）

もやもやされているところをしっかり体系化しつつ、キャリア教育をプログラム化できればいいのだというふうに思います。

（土肥委員）

我々の頭の中にキャリア教育の何たるかがまだ明確化されていないと思うのですけど。向井委員が言われるように、途中でやめてもいいじゃないかというのは大賛成です。安倍晋三内閣の時に、やり直しがきく社会が必要で、それを作るのだということだった。そういう社会で、やり直しが聞いて、みんなが認め合う社会なのだということをつくっていってほしかったんですが、結局派遣社員ばかり作っている次の政権になってしまいました。そういうことは、つまり、私たちの頭の中で、キャリア教育というものが今の議論の中でも整理されていないような気がします。松阪高校のキャリア教育はまた違うと思うのです。保護者も本人も、当面は大学に入るという目標を持っています。でも、その隙間隙間に流れている何かを埋めてあげないと、言われているような好きな科目、成績が良かった科目の大学に行って、そこで何かもやもやとして、仕事を探すみたいなことになってくるので、やっぱり松阪高校は松阪高校なりのキャリア教育をしていかなくてはあかんと思う。それ

はそれでインターンシップとはまたちょっと違うと思います。だから学校の違いでキャリア教育の違いがあってもいい。だからキャリア教育の何たるかを我々がもっと明確にわかりやすい形で。

（座　長）

やはり思うのは、県の教育委員会として議論されているので、高校でのキャリア教育が出口のような発言も、たまにちらほらとあるんですが、やはり大学とか社会の現実的なお話をすると、やはりキャリアというのは一生涯ですよね。その人がその道を選んできて、充実した人生で良かったなと思えるようにキャリアというものをもしとらえた場合には、ぜひ先ほども相談役から「シームレス」という言葉がありましたけれども、松阪高校とか地元の津高校のように大学に行くのであれば、大学でのキャリア教育というものの継続性もありますから、おしなべて同じであることはおかしいのではないかと思います。極端なことを言うと、社会に出てからもどこの部署に配属になったかでその人のキャリアも違いますし、例えば性別でも女性でも出産をした経験があれば、それも非常に代え難いキャリアというふうに考えたときに、やはり高校ごとに目指すべきキャリアとか、軸になるキャリアは違ってもいいのではないかと思いました。

（太田委員）

土肥委員が言われた松阪高校の（キャリア教育）という中で、３の「地域と共に創る学校づくり」で「ようこそ先輩の取組をやってはいても進学競争の中で効果が薄まってしまう」というのがあります。これは本当にそうなのかなというのが私の思いです。なぜかというと、短期的に見ればこのようなこともあるのかなあと思うのですが、例えば先輩でこのようなすばらしい人が出られたと、トヨタの社長になられた方で奥田さんという松阪工業（高校）出身の方がいましたが、そのような方が来られて話をされた。確かに忘れると思うんです。子どもですから。けれども、心のどこかにはおっしゃった言葉のいくつかがひっかかっていて、それが将来の自分を決めていくということがいっぱいあると思うんです。そういう体験をこの「ようこそ先輩」という取組ではいっぱいさせなければいけないと思うんです。先ほど土肥委員が言われたように「隙間隙間」です。その子どもが育っていく長年の隙間隙間に入っていけば、豊かなものが育っていくのではないかと思うんですが、ここで言いたいのは、今日本では中小企業を起業するという起業家がものすごい勢いで減っています。これを増やさないと、私はこの国は大企業だけでもつ国ではありませんから、だめだと思うのです。という意味においては、地域の中小企業のオーナー経営者であるとか、例えば私が所属している青年会議所なんかのメンバーやＯＢはおしゃべり好きが一杯いますから、自分が一杯しゃべりたい人がいますから、それが本当にいいかどうかは別にして、その人たちの話を聞くということがあっても私はいいのかと思います。地元の本当に小さい、（従業員が）５人～２０人の中小企業の社長が地域のこのような人づくりに貢献できるというところに私は活力があると思うし、青年会議所のメンバーというのはそのようなところをものすごく勉強していますから、地域のために私たちは生きなければ

いけないと思っていますので、喜んで引き受けると思います。ですからそのようなところを是非とも活用していただければ、地元の中小企業の経営者たちにとってもものすごいやりがい、生きがいになりますし、「背筋が伸びる」と思うんです。高校生や中学生の前でしゃべるといったら、おそらく勉強し直すと思いますし、子どもたちにとってもいい大学を出てすばらしい超一流企業に行くのも一つのあり方でしょう。官僚になる者もあるかもわかりません。けれども自分で汗をかいて、泥臭くてもいいから自分で企業を起こすんだという子が出てきても、それは地域のため、国のためになると思うので、そういう中小企業を起こしていく人を何とかつくりたい。その辺を事務局でぜひ文章にして入れてほしいと思います。これは（資料を）読んでも触れられていないところです。ですからそういう人づくりもこの国には必要だし、この地域には必要だと思うのでお願いしたいなと思います。

（向井委員）

教えるための基礎を勝手にしゃべってもらうよりも、経済界でこういうパターンで進めてください、そしてあなたの希望をまわしてください。これが教育に携わるものではないかと思っているので、一度、教育委員会と経済界でそのようなものを作ってみたい。そして常にすりあわせをしながら進めていき、あまり自分が勉強して勝手にしゃべるのもなかなか定着しない、ということがホンダ学園を作ってみてわかったので、できればそのこともマニュアル化して、「あなたの夢のお手伝い」をしたい。また土肥委員が言われたように、５割の方がやめても、次にキャリアアップしてもらったらいいじゃないかとも思っている。

（松岡委員）

インターンシップやデュアル・システムとはちょっと違うかもしれないんですけれども、企業の中ではよく「不易流行」と言われる。きちんと守っていかなければならない部分と、時代の変化に伴って変えていかなければならない部分があるわけなんですが、私は「不易」の部分をしっかりと子どもたちに教えていくことが、結局あとで社会に出てから順応性や企業でやりがいをもって働くうえで非常にプラスになるのではないかと思います。そういうことをしっかりとやっていくことを、インターンシップとどのように結びつけていくかということは難しいと思うんですが、先ほど太田委員が言われたように、人間関係をどんなふうに作っていくとか、社会に貢献するとか、本当に基本中の基本となるところが、小学校のうちから、働くという意味を考えるうえで大切なところだと思うんですけれども、ぜひ、そういう教育を入れていくことができないかと思う。

（座　長）

前回で普通科と専門学科の学生のキャリア教育についての議論がかなりなされましたが、そのあたりにも関わってくると思うんですが、「不易」の部分を学ぶことをインターンシップや社会学習でできるということに関しては、たぶん奥田委員がおっしゃったこと、皆さんがおっしゃったことが整理できて、固定的なところ、「不易」の部分というのに入れば、非常にわかりやすく整理ができているのではないかなと思います。「不易」の部分はどこに

進学しても就職しても必要な部分ですので、それを系統的にイメージできればちょっと整理できるのではないかと思う。

（松岡委員）

そういうものは高校であれ、大学であれ、すばらしいことだと思います。

（奥田委員）

３番の「地域と共につくる学校づくり」のところで、例えば、高校生であっても自分たちが幼稚園の時から築いてきた高校生なりのキャリアというものがあるじゃないですか。それが小学生とか幼稚園児にフィードバックできるようなキャリア教育もあっていいし、逆に卒業生から学ぶものもある。だから高校生でも、大学生であったり、先輩たちから学ぶ。「地域と共につくる学校づくり」の中で、それぞれが小・中・高・大学と行っているなら、それぞれに自分たちもキャリア教育を受ける側なんだけど、与える側にもまわれるんだというふうにすれば、心の部分でもっと生き生きできるんじゃないか。やはり、憧れる高校生であって、高校生は憧れる大学生であってというのもキャリア教育では大事だと思います。

（座　長）

手が届く年齢層の方が見本というのは、すごく実現できそうな感じです。まだまだご発言いただきたい方が非常に多いと思うのですが、審議させていただく前にお願いしましたように、今回の審議については、次回の第３回の分科会につなげていきたいと思います。やはりキャリア教育のことについて、今日も多く発言がありましたが、資料３を見ていただきますと、例えば特別支援学校の件につきましても、前回に事務局から提示いただいた課題ですが、あまり意見もまだ出ていないと思いますし、柱としては３番、４番あたりですが、奥田委員からは「群れられない教員」という話もありました。そういう部分も含めて、次回の第３回の分科会までには資料を熟読いただき、多岐にわたるご意見をいただきたいと思います。今から５分ほど時間をいただき、皆様からいただきました意見を、私と事務局で整理させていただきたいと思います。

＜意見の整理・休憩＞

（座　長）

本日は中間的ということではあるんですが、忌憚なく活発にご意見をいただき、ありがとうございました。それぞれの委員の皆様からいただきました意見を少し重なり合いながら段階的にお話いただいたと思いますが、その中から、向井委員からご提案いただきました三重らしい教育や三重らしい人物像ということに関しても念頭に置いていただきながら、三重県の実業界、産業界からそういった教育プログラムを考えていただき、そして教育委員会とも連携をしながら、より良いものを作っていく、それをどこかのモデル校で一度やっていただきながら、普及をさせていただくという取組についてもご提案いただきました。

その辺につきましても具体的に活字にしていっていただきたいと思っています。そして、土肥委員から意見がありましたが、学校の違いによってキャリア教育は違ってもいいんじゃないかという意見がありました。それを考えていくにあたって、キャリア教育がどういうものであるのかということについて今一度、整理し、共通の認識を持つ必要があるのではないかというのが非常に重要なところだと思っています。それを具体的にしていくということにあたっては、地域と共に歩むという観点から先輩が学校に戻ってくる、地域に戻ってくるということで、循環型でキャリアを育てていくという仕組み、これも実現の可能性の高い取組だと思いますので、これも具体的な方策というところに組み入れていただきたいと思っています。そして、本日の基調講演になると思いますが、須田相談役からありましたが、基礎学力は必要であろうということで、基礎学力とそれに伴う人間性や社会力、これにウェイトを変えながら力を入れて両方育てていくというあたりについても骨子の中に入れていただきたいと思っています。そして、松岡委員からありました「不易」の部分と「流行」の部分です。今一度キャリア教育という観点からの、キャリア教育における「不易」の部分は何であるのか、そして「流行」の部分は何であるのかを少し視点をもってキャリア教育の具現にあたって考えたらどうかと思っています。その辺の観点でキャリア教育をしていく、そして各校におけるキャリア教育を整理していくということで、具体性を見い出していくことはできるのではないかというあたりが議論の中心になったのではないかと思っています。何か漏れているところがありましたらお願いします。

（事務局）

ご質問についてはまとめの中に入っていませんが、今まとめていただいたことを具体的な政策に結びつけたり、仕組みづくりに生かしていけたらと思っています。

（座　長）

それでは、以上で審議を終了させていただきたいと思います。

（事務局）

委員の皆様、熱心なご議論ありがとうございました。最後に次回の会議について連絡をさせていただきます。第３回の会議につきましては、調整しました結果、９月３０日となる可能性が一番高いと考えています。本日はありがとうございました。これをもちまして終了します。